婦人衛生雜誌

明治四十四年八月二十日發行

第二百六十一號

婦人衞生雜誌

第二百六十一號目次

會告

一、暑さ凌き難く候處會員諸姉には益々御健勝慶賀の至に御座候

一、本會前半期會計整理上の都合有之候間會費未納前金切れの御方は何卒此際御送金の程希望致候

一、本月例會は例年の通り休會致候

一、御知己の方は可成本會へ入會せられ候樣御勸誘願上候

明治四十四年八月

私立大日本婦人衞生會

會員各位

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらず、かならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んといふとも得からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす、抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつはら學ぶべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相導て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども人の衛生の事に至りては更に注意を忘かさるもの、如くまことに口惜しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尚之を筆記して冊子と編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに資すあらんとす玆に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸彦姉に告げ其贊成を仰ぐこと爾り

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保護する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置く地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の者は姓名族稱住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續登未に許なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす、終身會員は一時に金廿五圓以上、特別會員は一ヶ月金三拾錢以上、通常會員は一ヶ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を贊成する者は之を贊成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に贊成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受くることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戾せず●第九條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を[illegible]族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三五名、書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は毎年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命す但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託するとあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る會事の分課を設け第一會計、第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の任●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生ずるときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす例會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月にを開き但し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め圓遊會を開くことあるべし●第十七條　每會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員をして隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會場に誘致し講義演說等を傍聽せしむることを得（但衣服は總て質素たるべき事）●第十九條　講談演說等は政事の係總を禁す●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　每年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の增減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することと定め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其費數を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同し●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件

第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金錢若くは書籍物品等を本會に寄附する者ある時は本會々長の名を以て禮狀を贈り寄贈者の姓名及品目を雜誌に揭錄し倂て本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送付として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割增）●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし小爲替にて本會事務所々在の郵便局（麹町區富士見町郵便取扱所宛）振出しあるべし●第卅四條　會員中若し本會の障礙となるべき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麹町區富士見町二丁目廿二番地　私立大日本婦人衛生會

（前附の二）

講演

お酒の話

醫學博士　林　春雄

今日はお酒のお話を致します、私は今から約十年ほど前に本會から御招待に與りまして、嘗て本會に於て一場の講演を致しまする光榮を得たのでありまするが、今日亦本會より御招待を戴きまして、一場の講演を致しますのは私に取つて極めて光榮と致しまする所であります、で今日は酒のお話を致しませうと思ふのであります。

酒のことは御夫人が本會の會員、殊に依ると幹事をして居らつしやいますが、吾々の先輩である、大澤、片山の兩博士が豫て酒の反對では兩横綱で、常に酒のことに就て反對でございます、殊に本會に於ても酒の害に就ては十分お話があつたらうと思ふのであります、從つて私も此酒の反對黨の近頃の流行言葉で言ふ陣笠である、極く末派でございます、其一人として先輩が既に論じ盡されたところを、再び詳しくお話する必要はないと思ふのであります。併ながら昔の人が申しましたに『溫故知新』古い事でも度々繰返して來ると其中に新らしい事があると云ふやうなことで、でありますからして私は此酒と云ふ問題を特に撰んだのであります。併ながら今日私が此處でお話しやうと云ふのは、特に酒が何故に惡いと云ふやうなことは詳しくお話は致しませぬので、それよりは寧ろ何故人が酒を飲むか、どうして人間と云ふものは酒を飲みたがり、從つて酒の害に罹り、何故に酒を飲みたがると云ふことを少しお話致して、從つてどう云ふことが酒を飲むと云ふ原

因になつたか、どう云ふやうにして酒を飲みたがるのを豫防したら宜いか、從つて自然人が酒を飲まないやうになるか、如何にして酒を飲みたがる豫防をしたら宜いかと云ふことを少しお話したいと思ひます。

總て酒或は酒に似た物、醫者の方の言葉で申しますと所謂麻醉劑、即ち人の腦を麻痺する、即ち吾々の中樞神經系統、神經を主宰して居る一番の眞中になるところであります、其處を麻痺する働を有つて居る、醫者の方で麻醉劑と云ふので、矢張り酒も麻醉劑の一つであります。是等の麻醉劑は一體どう云ふ働があるのであるか、是は人間でも他の動物でも同じことであります。或は植物の種類でも矢張り同じことであります、總て一番高等に發達して居る處が一番先きに冒されるのであります、で植物などでも矢張り同じことであります。

例へば皆樣が植木屋などにゐらつしやるとお辭儀草と云ふ草がありますが、一寸何かさはると其草の葉が萎んでお辭儀をする草である、それ等は大變に高等に發達して居るので、他の植物にないのである、それ等の草が矢張り酒精なり、酒精に似た麻醉劑などを注ぐと一番先きに御辭儀が出來なくなる、それは他の動物でも矢張りさうです。例へば猿でありますが、猿は意地の惡い動物でありますが藝を仕込んで芝居をやらせると、芝居をすると云ふやうな進歩した動物であるが、それに酒を飲ませますると意地の惡いところは麻痺して大變機嫌が克くなりますが其替り智惠も麻痺して馬鹿になり芝居も何にもしなくなつて仕舞ふ、人間も矢張り、さうである人間に酒を飲ませると、人間の腦の中で一番高等に發育して居るところが一番先きにやられる、例へば分別のあつたものが分別がなくなると云ふ、所謂無分別になるので、一段下つた人になる、今まで分別のある人は其分別がなくなる、酒の爲めに麻痺して來る、思慮も大變に深く、慮りも大變に深くつて、或は物を判斷する力、或は道義の觀念、道德心と云ふや

うな總て人間の精神の働の中で、一番高等に發育した、卽ち一番高尙の部分、其部分が酒の爲めにやられる、酒を飮むと分別のある人も無分別になり、或は思慮の深かつた人も思慮がなくなる、確かなる判斷力のあつた人が、卽ち略言すれば酒を飮むと其人は、人格の一段下の人に變化して來る、それは何故かと云ふと、吾々の腦の中で一番高等に發達して居るところが、酒の爲めに一番先きに麻痺して仕舞ふ。さうしますると大層其點が酒が非常に惡いやうですが、又其點が今日酒が藥などに用ゐられる點である、それは何故かと云ふと總て人が一定の病氣に罹ります、或は吾々の方で病的狀態と云ふ、大變に草臥れたとか、忙がしい仕事があつて草臥れたとか、或は步いた爲めに疲れたとか、或は試驗前で勉强したとか、或は大變な心配があるとか非常な悲哀があるとか云ふやうな、總て當り前でない、多少外部からして自分に加はる、卽ち外來の惡い影響が自分の身體、若しくは精神に加りまして、それが爲めに身體が病氣ではありませぬけれども、所謂病氣に似た狀態、病的狀態と云ふやうな、場合とか、或は實際病氣になりまするとご承知の通り非常に心地がわるい所謂病感と申します、或は病氣が癒りましても、重い病氣のあとで、自分の身體が恢復期であるから、氣分もはつきりしない、衰へた感じが多い、斯う云ふやうな工合で、本當の病氣、若しくは病的の時に酒を少し飮みますと、惡い感じがなくなつて、大層好い心持になる、それは何故かと云ふと、總て病的の狀態の時に、矢張り外部から來る影響の爲めに、腦髓の中で一番發達して居る部分が、それに冒される、それ故に體が何處となく痛いでもなし、何處が苦しいでもないが、何んとなしに誠に體の工合が惡い、或は非常に草臥れて居るとか、非常に心配して居ると云ふやうな時に、酒を飮むと好い心持になつて、氣分が爽になつて、それが爲めに食事が出來なかつた人も、食事が出來る、或は外に出て運動をすると云ふ氣も出なかつた人が、酒を飮むと運動でも

しようと云ふ心持が出ると云ふやうになるとか、或は人と話をするも厭やだと云ふやうな狀態になつて居つた人が酒を飲むと快く談話すると云ふやうになる、それ故に其働きを語り醫者の方では、藥に應用するやうになつて居る、それが卽ち酒が良く用ゐられるのであります。ところが其酒が大層人の心地を好くすると云ふことが、此酒が濫用される基になる、其心地好くなる狀態を、醫者の方ではラテン語でEuphoria ユーフォリアと申します。是は餘り良い譯字がありませぬが、快意と申して居るので、大變に良い心持になる、是は酒ばかりではない、總て酒に類似した麻醉劑はユーフォリアを起す、「モルヒ子」でも、支那人の澤山に飲みますが、阿片などでも矢張りユーフォリアを起す、何んとも言はれない唯好い心持がする、酒が今お話致しました通りユーフォリアを起すので、それが酒を或る場合に藥に用ゐられて效があるところである。今迄鬱憂として居つた人が、氣がはつきりして來る、食事をしなかつた人も食事をし、運動する氣もなかつたのが運動をする、人と話をするのが厭やだと云ふ人が、人と話して大變良い心持になり、或は病氣であれば病氣が早く癒る、或は病的の狀態であれば、夫れが消失し又病氣であれば恢復期が早い、さう云ふ風に良く用ゐれば、大層宜い、所が是が又濫用される原因になる、何故に濫用される原因があるかと云ふことを少し御話致します。

此處に皆樣がお年のお若い方々も大分お集りでありますが、總て我國では、女の方は餘り酒を上らない習慣である、又外國でも、女が酒は飲みますけれども、無暗に酒を澤山飲むのは宜くない、それは宴會などでは多少は飲みますが、婦人は酒で醉ふ程に飲まぬので、殊に我國の婦人は、酒は全く上らない、從つて皆さんに酒のことの、お話は餘り直接の效はないやうでありますが、之に反して男子はどうも酒を飲む人の方が多い、皆男の方は酒を飲む、其酒を飲むと云ふのはうど云ふ譯であるかと云ふと、是は

習慣其他色々の關係もございませうが、詰り男は世の中に出て、今日の言葉で申しますると、生存競爭を盛んにやる、此の方は御婦人より男の方が盛に外に出る、近來は女子の方も本校のやうな、女子職業學校も出來まして、女の方でも生存競爭の中に入ると、云ふことを明かに示して居る、然し兎に角今日と雖、男の方が生存競爭場裡に御婦人よりも餘計出る、從つて世の中に出ますと、生存競爭は人と競爭するのであるから、何時でも勝つと云ふ譯には行かない、なか／＼骨が折れるので、大に働かなければならぬ、大に働いても負けることがある、或は一家の主人であれば、家族に對して主人たる自分の責任を負はなければならぬ、或は外に出て自分の爲すべき仕事に付て始終心配とか、苦勞とかゞ多い、心配苦勞が多し、用は多いと云ふことでありますから、自然精神或は身體も疲勞致しまして、さうして先程私が申上げました、所謂病的の狀態になつて、さうして家に歸つて來てもまだ疲勞して居るところに、家にも亦心配があると云ふやうなことがある、それ等の狀態の時に酒を飲みますと云ふと大層好い心持になる、今まで心配があつたものが、何時の間にか消えて仕舞ふ、或は家に歸つてどうもがつかりして、元氣がないと云ふやうな時に一杯酒を飲むと惡い心持がなくなつて、愉快になる、所謂、快意の感を起す大層好い心持になる、それ故に一遍其味を覺えますと、今度は疲れた時に勿論酒が欲しくなる、酒を飲んで大層好い心持になつたから、今も疲れたから酒を飲むと云ふやうに、一遍酒を飲むと又飲みたくなる、終には疲れなくつても、今日は日曜で雨が降る家に居つて詰らないから酒を飲む、斯う云ふ場合が酒を飲む動機になるので、初めは病的の狀態を救ふやうな積りで酒を飲む、後には無聊を慰めると云ふやうなことで矢張り酒を飲む、酒を飲むと云ふと今お話した通り快意を覺えて精神も爽快になる、身體に倦怠を覺えて惰るいやうな心持がしても大變快くなる、それだけ位酒を用ゐれば大層都合

が好い、素人が自分で手酌で酒を飲んでも大して害はない、醫者が藥に用ゐる程度に飲めば害はない、或は寧ろ場合に依りますれば、利益があるのであります、所が酒は今私が一番初めにお話致しました通り、酒を一杯飲みました時に人間の身體の中で一番高等に發育して居るところの分別、思慮、或は判斷道義の觀念と云ふやうなものが、酒の爲めに痲痺して來ます、さうして其人が酒を飲んだ爲めに爽快を覺えて好い心持になると同時に、其人が酒の爲めに人格の一段下つた人間になる、分別あり、思慮あり、道德心も深い、判斷も確かな人であつたのであります、所が疲れたと云ふて、其疲れを除くが爲めに一杯飲むと其人が多少醉ふて來ます、さうすると其醉ふたが爲めに一段下の人になる、さうすると其人は思慮分別も少なくなる、まう一杯酒を飲むと一杯では濟まぬと云ふので、詰り段々それが爲めに遂には澤山な酒を飲む、又それが習慣になつて酒好家となる、それ等の人は酒の爲めに呑まれるのであります。

昔の人の經驗からして能く言ふて居る言葉がある、一杯にして人酒を呑み、二杯にして酒、酒を呑み、三杯にして酒人を呑むと云ふやうなことを言ふて居る、實に其通りである、初は自分はちやんと思慮ありて一定の目的で酒を飲むと、酒の爲めに今申す通り、思慮分別が痲痺して仕舞つて、更に酒を飲むのであります、酒には泥醉して滅茶々々に、其酒の爲めに自分が飲まれる、昔の人の經驗からして申したのであります、それで尙ほ酒に就て昔の金言がありまして、是等は今日酒の働きから見ると、實にうまく言ふたものであります、今から約三千年の昔、支那に禹と云ふ聖人がありました、其人の臣下に儀狄と云ふ人があつて、其人が酒を造つて是を侑めました、所が禹が是を飲んで甘と申しました「禹飲而甘之絶旨酒曰後世必有以酒亡其國者」と云ふことがありますが、酒を飲んで甘かつたから、さう云ふものを飲むと是が爲めに國を亡すだらうと言はれたと云ふことです、菓子を喰ても胃を惡くする位の

事はあるかも知れませぬが、菓子を食て國を亡すには到らぬのである、何故かと言ふと菓子は喰べれば甘いだけで、腦を麻痺するだけの働はない、所が禹と云ふ人も聖人でありましたからして、隨分國事に骨を折つていろ〳〵心配せられたことでありませうし、政治に付ていろ〳〵な用も澤山持つて居るので、自然精神身體に疲勞を覺えることがあつたのであります、其時分に酒と云ふものが出來たものだから如何でございますと御侑めしたもんだから一杯飲んで見たら大層好い心持になつた、ところが其時分に禹と云ふ人は豪い人であるから其非常に好い心持になると云ふことが誠に惡いと云ふことを心附いた、即ち酒の爲めに好い心持になつて居ると、其中に自然怠り勝ちになつて、唯一時の快を貪つてそれが爲めに國事をも怠つて遂に國を亡すことがあるであらうと云ふことを言はれたに違ひない、禹と云ふ人も矢張り酒を飲んで醉はれたに違ひない、尤も其のことは一度醉つて見なければ其邊のことはお分りにならないのであるが、詰り酒を飲むことは快意を起すと云ふ事を申されたのであります。

私が今日特に酒のお話を致しますに就ては、是から皆樣に其事に就て一つお考を願ひたい事があります、即ち酒を飲むと云ふのは何が重に原因であるかと申すと、今お話した通り酒は快意を起す、酒を飲みますといろ〳〵な苦心であるとか心配であるとか、或は哀しいことがあつても酒を飲むと忘れて仕舞ふ、或は草臥れて居つた、其草臥も除かれる、其事實が即ち酒を人が飲む原因であります、即ち人は自分の體或は自分の心に來る、いろ〳〵な苦勞であるとか、心配であるとか苦痛であるとか、さまざまの苦痛を忘れむとして酒を飲むので、殊に先程お話申した通り、男が酒を飲むので、男子は世の中に出でゝ生存競爭場裡でいろ〳〵奮鬪をやるのでありますから、骨を折らなければならず、其競爭をして居る間には何時でも競爭に勝利を得ると云ふことばかりはない、他人を咎めることもあり又他人に自分

が苦めらるゝこともある、始終自分が苦んで居る、恰度競走をして勝つた人でも矢張り苦しまなければ勝てない、負けた人は負けるのですから一層苦しむことになる、兎に角生存競爭場裡に出て、勝ても負けても苦しむ、夫れ故に男子は家に歸つて其苦痛を忘れ安慰を得むと欲して疲れたる足を急ぐのであります。然るに家に歸つても十分の安慰を以てそれを忘れることが出來ないもの、忘れることが出來ないのみならず、自分が家に歸つて更に自分の苦痛を増すやうな種があつたならば、卽ち自分の家庭に更に自分の苦痛を増すべき種があるとか云ふやうなことがありましたならば、外で十分に苦痛を感じ心配を覺えて來た人が更に自分の家に歸つて心配があつては心強い男子と雖も苦痛を感じなければならぬ、斯う云ふ狀態にあります人はどうでありませう、益益澤山の苦痛に堪えず、或は其苦勞に堪えずして酒を飮んで、僅かに快を貪ると云ふことになるのは人情の弱點で止むを得ぬのであります、それであるから私が男が酒を飮むのが當然であると云ふことを申すのではありませぬ。卽ち私は男子に對して、そんな薄志弱行なことではならぬ、自分は男子であるから、僅かな苦痛があるからと云ふて、酒の力を借りなければ忘れられないと云ふやうな弱いことでは男子としてあるべからざることであります けれども、併しながらそれは人間の弱點であります、先づさう言ふことがあつたならば兎に角許してやらなければならぬ、どうしてもさう云ふやうな點から自然酒を嗜むと云ふ傾が多くなる、で、それ故に私は其點を今日お集りになりました卽ち本會の會員及會員以外のお若い方々に其ことをお考へを願ひたい、卽ち自分の一家の主人である男子或は皆樣の、例へば子息であるとか、或は弟であるとか、學校などに行つてあらつしやるお若い方々でありましたならばそれ等の人が相當に世の中に出てゝ生存競爭場裡からして自分の家に歸つて、卽ち家庭に歸つて來られた時に、其家庭はなるべく溫かくなるべく、樂し

くあるやうに我等は常に望むのであります、先づ家庭が温かく、樂しくあると云ふことが先づ第一必要であります、先づ第一に自分の家庭の心配の種がないと云ふ爲めには、即ち自分の家に一人も病人がない、即ち皆健かであると云ふ樣にしたい、即ち皆さんの子弟、子女が悉く皆丈夫でないと云ふことが御主人にとつては一番心配の種であります、外に出て居つても病人がなければ自分の家を顧慮する必要はない、即ち是は一家の主婦となり人の母となり或は人の妻となられる御方にあつては子女の健康は勿論のこと、御自分の健康にも注意して夫の爲めに内顧の憂なからしむると云ふ事であります、本會を設立せられし主旨の一つは必ず其處にあらうと思ひます。兎に角一家を悉く健かにし或はお若い方は父母のお世話にならぬでも自分だけは病氣にお罹りにならないやうに御心懸けになると云ふことが第一であります。

それから第二には單に體が丈夫であると云ふだけでは未だどうも家庭が十分に樂しく行く譯には行かない、即ち皆が丈夫であると云ふことが第一の要件、其次の第二の要件としては即ち是は精神的の方であります、即ち家庭の整理並に家に於ける家庭の間が極く圓滿に極く樂しく行くと云ふことが必要であらうと思ひます、此事に對しては、是は殊に敎育家であるとか或は敎育の方面に充分の趣味を有つて居られる方々のやる、御心配になられることでありまして、私などの喙を容れる所ではありませぬからそれに對して今日は申上げないのであります、併ながら一家が最も樂しく行くと云ふことに對しては、主人の心掛は勿論のことでありますけれども矢張り一家の主婦並に一家の子女たる人々の心掛が必要であると云ふことは確かなことであります。それ故に私は殊にお若い方々でありまして、將來家を作りて、即ち人の妻となり人の母となられる方々でありますからして、自分の子供、自分の子女等に至るまで家庭に於て最も樂しくされることが出來ましたならば、

即ち男子が家庭以外に於きまして、生存競爭の爲めに、自分が苦痛を覺えて、苦んで草臥れて、家に歸つて來た、時に十分に自分の家庭で樂ましむることが出來たならば、殊更に自分が酒を飲んで、酒の爲めに愉快を求めやう、憂さを忘れやうと云ふの必要はなからしめるやうにありたいと思ふのであります、私は今日それ等の方法に對して、是は教育家の殊に女子教育に從事されて居る方々の注意されて居る事柄でありまするから、それに就ては私は申しませぬで、唯其點に就てそれは男子が酒を飲むと云ふことの大なる原因の一になると云ふ事を心に持て如何にして夫れを豫防すべきかと云ふ點に就て充分に各自御自身に御研究と言ひますか御工風でありますか兎に角充分に御考あらむことを私は希望するのであります。

先づ私の講演はそれで終りました、終に臨みまして本會の總裁東伏見宮妃殿下を始め奉り、會頭職員會員の貴婦人令孃方が、充分に本會の主旨の如き御自分並に御自分の家庭の健康を維持せられて、さうしてそれに依つて其家庭の長たる夫、或は從たる子女たる人に十分に慰安を與へられまして、さうしてそれに依つて、今日世界に居る總ての人類が、酒と云ふものゝ害毒の爲に日々害を受け、夫れがために、漸次自ら其退化を促しつゝあるのを救濟せられむことを冀望するのであります。

叢談

結婚と心臟病

ドクトル　ヤシユケー述

心臟に故障ある人は結婚して惡いか、又差支ないかと云ふことは屢々問題になることで、實際結婚前の婦人に取ては決して忽にならぬことで、又六ケ敷い問題でありますが、ドクトル、ヤシユケー

氏の『心臟病ある處女は結婚して可なるか』と云ふ題で獨逸雜誌ウユシャウ誌上掲載してある一篇は、簡短ながら頗る要領を得て居ると思ひましたから、こゝに抄譯して讀者諸姉の御參考に供することゝ致しました（譯者）

凡て有害の事を避けて以て病氣を防がうと云ふのは、今日の醫學の趨勢で、益々さうなつて參りますが、殊に結婚に依て病氣に影響を及ぼすと云ふ場合には大事な問題であります、已に多くの醫家は、心臟病のある處女は結婚をしても差支が無いか否かと云ふ問題に就て論じて居りますが、どうも今日迄の所意見が全く一致すると云ふ譯には參りません。

先づ心臟の瓣膜の病氣と、心臟筋肉の病氣とを明かに區別することが必要である。心臟瓣膜病であれば、甚しい變化のあるものは別として、普通それだけでは大概格別の危險は無いもので、百人中の九十八人までは、何の障もなくお產をして居ります。これはお產の時に必要な心臟の大役も、決して用意なしに來るものでないと云ふことを考へれば分つた話で、已に妊娠して居る間に、心臟は漸次この大役に適するやうに慣れる暇があるのであります、と云ふものゝ、瓣膜病ある心臟は健全なるものと何處迄も同じであるとは申されません、大に考へなければならぬ所の危險がある、それは年齡の關係でありまして、瓣膜病のある心臟は、四回乃至六回もお產をした後又は四十年代の終或は五十年代の始にもなれば、最早新に起る所の妊娠分娩の要求を何ともなしに、症狀を呈せずに滿たすだけの力は無くなるのであります。然らば斯樣の事になる時期は何時かと云ふと、これは單り瓣膜病の重い輕いばかりでなく、寧ろ心臟筋肉が全く健康であるか否やに關するのでありまして、これを診定しますのには、最初は大に醫師の經驗が要るのであります、尙ほ一つ危險と云ふべきものは、心臟の惡い婦人が妊娠をした際に、腎臟炎を併發することであります。それで先づ一般には、『純粹の心臟瓣膜病は、處女に結婚を禁ずべき

理由と爲すに足らず』と言ふことが出來やうと思ふ。然しこれは確かに他に雜のない瓣膜病であると云ふことを診定めるのは、餘程經驗に富だ醫者でなければ六ケ敷いので、かう云ふ婦人は、何時でも妊娠の時には、醫師に監視してもらはなければなりません、尚ほ小兒の數を制限すると云ふことも大切なことである。も一つ言ひ添へて置くのは、心臟病ある婦人は何れも授乳して差支ない、小兒に乳を哺ますべきものであると云ふことであります。

小兒の數を制限すると云ふことは、經驗に據て見ると、瓣膜障碍では、晩年になりまして、度々妊娠分娩しました後には、心筋の力が衰へて來るからのことであります。これから見ましても、心筋の病氣は、最初から、瓣膜病よりも不良いと云ふことが出來ます。本來の心筋炎を別としましても、多少著しく心臟の働を惡くする所の心筋の病氣が種々ありますが、これは瓣膜病に併發して來ると、それだけであるとに拘らず、何時でも斯樣の場合には、大に氣を付けねばならぬのであります。

いよ〳〵結婚を許しても宜いかと、云ふ段になると、これは唯だ久しい間觀察し、反復して心臟の働を檢査した上でなければ定めることは出來ない。縱令結婚は許した所で、何時でも妊娠の後には、委しく心臟の模樣を前に對照して見なければならぬ、而して若し一度危險の徵候が現はれた時には、手術をするとか、其他の方法に依て今後の妊娠を防ぐことが必要になつて來るのであります。

神經性の心臟病と稱するものは、これは通常全く危險のないものであるが、然しこれにも亦取除の場合がないでもない。面白いのは、近年に至つて確定された神經性の心臟病で、性慾の滿足されない爲に起るものがある、斯樣なものは結婚すれば無論忽ち癒るのであります。

情交の問題は、愼を加へれば、何れの心臟病患者と雖も、許されますが、度を過し、殊に異常の滿足を欲するやうなことは、心臟病患者に取ては宜しくな

いことであります。

以上述べました所を括つて申せば、合併症なき純粋の心臓瓣膜病患者は、決して結婚禁止の必要はない。然し心筋に病氣のある場合には、結婚許可の問題は、唯最も信ずるに足る醫師が、久しい間の觀察に依て心臓の機能を檢査した上で決定することが出來る。と云ふことになります。

亞米利加土人に學ぶべき點

吾人の文明はインヂアンに比して遙に高等の階級に達して居ることは申迄もないが、然とて又インヂアンに學ぶべき所が無いでもない。一體に吾々は野蠻人、未開國など云ふと、只その缺點や醜い所などばかりを評して、その取るべき徳を顧みぬが常でありますけれども、何れの野蠻人、未開國に就て見ても、多少吾々の今更學ぶべき所の事があると思ふ。何れの國民も昔はさうであつたらうと思ひますが、インヂアン即ち亞米利加土人は天然界に於ける自然の藥效に就ては誠に能く承知して居ります。平生屋外に住居して居りまして、只その身體のみならず、その心も精神も常に家の外に在るのであります。非常に寒い天氣でもなければ、家は丸で開け放して、風の吹くがまゝに任せて置きますが、隙間の風とか風を引くとか云ふやうなことは平氣なもので、斯樣な事は全く知らないのであります。若し白色人種などが、新鮮な、清潔な薫風の通はぬ家の内に閉籠つて居ると云ふことを聞かしたならば、彼等は頭を振つて、その愚さに呆れ、これ恰も良友の面前に戸を立てるやうなものであると思ふに違ひない。インヂアンは外に眠り、外に食し、外に働き、殆ど一切の儀式を外で行ふて居るのであります。

夜の空氣に依て感冒に罹ると云ふて恐れますけれども、これは寧ろ暖爐や火鉢で暖められ、呼吸や皮膚の發散物で不淨にされた空氣を吸ふて、粘膜の炎症を起す方が本であらうと思はれる。

この大森林の住民は外に住で居つても、飾り衣服と云ふものが要らない、傍に白人でも居らなければ殆ど、裸體で行きます。畢竟彼等は、今日の醫者がやうやく研究した上で、新たなる力と健康を得るには、身體を空氣と日光に晒らすが宜いとか、病氣も、清潔な空氣と日光には依りつけないとか云ふことを自然實行して居るのであります。

これは學ぶに足ることで、吾々も機會を見て、時々新鮮な空氣と日光を全身に浴びるが宜からうと思ふのである。

天然の中に生活することは、此等インヂアン人に如何なる影響を及ぼして居るかと云ふに、矢張古代の人間の如く、一切の物の中に神の力を認めて居る、即ち神は吹荒さぶ嵐の中に、潺湲たる小川の、せゝらぎの中に、澎湃たる大洋の怒濤の中に、天聳る高嶺の上に、小高き岡の上に、木に於て、峯に於て、蕾に、花に於て談ることなし、神は花に香を與へ、種より木を生えしめ、日を照らし、雨を降らし、露を濡らし、軟風をそよがしめ給ふとなし、葉はこれその聲にして、自然中の總てのものこれ、その思想の表現であると心得て居る。

斯樣な信仰に依て、インヂアンは自然を研究せんとして、その觀察力はなか〳〵鋭くなつて居ります。乃ち諸種の植物に就て、それが何時何處に生ずると云ふことを能く知つて居る、又諸種の鳥類、昆蟲、爬蟲類及び哺乳動物を識つて居り、天候を伺ひ又、動植物の性癖などに就ては、書物學問の博物家よりも餘程能く知つて居るのであります。又彼等は一種の詩人の、辯舌家で、その天然より得來つた知識を歌に話に應用致します。

それからインヂアンは鼻で呼吸することに重きを置いて、小兒が生れますと、母は能くその小兒の呼吸に氣を付けて、若し正しく呼吸をしない場合には、小兒が鼻から自然に安らかに呼吸する迄、その脣を確かり壓へつけたり、或は皮を口にあてゝ下顎がしまるやうに頭に縛つたりするのを見ますが、斯樣に

小兒の中から必ず鼻で呼吸するやうに努めまして、決して口で呼吸を致しません。吾々が街を歩いて居りますと、往々、茫やりした眼で、間の抜けた顔をした人に逢ひますが、これは大抵口で呼吸する質の人で、醫者は、斯樣な人は記憶が惡く、理解力にも乏しいと云ふことを申しますがこれはその他にも種々の危險がある。一體鼻から呼吸致しますと、空中の塵埃や黴菌が鼻氣で漉され、粘膜に止まり、鼻をかめば背外に出されて仕舞ふ、鼻の腔の畝つて居るのも、前の處で止め兼ねた有害物は、次の處で防ぐと云ふ仕掛であらうと思はれる、その他寒い空氣は鼻の中を通る間に、程善く溫められますが、若し口から呼吸することになりますと、此等の塵埃や黴菌が、直接咽喉から氣管、肺までも素通りをする、寒い空氣も咽喉の粘膜を刺戟する、斯樣の所からして、恐るべき彼の實扶的里、窒扶斯、殊に結核などゝ云ふ病氣も起り、少なくとも咽頭加答兒、喉頭加答兒、氣管支加答兒、肺炎などゝ云ふ種々の病氣が起るのであります。それであるから是非鼻で呼吸することが必要である、口を呼吸器とし、鼻を發聲器とするは間違つて居る、若し特別の病氣も無いのに口で呼吸する癖のある人は、宜しくインチアン流に顋を頭に縛つて、鼻だけで呼吸するやうにしなければなりません。

インチアンは鼻呼吸を重ずるのみならず、又能く深呼吸をする方法を知つて居る。ある人が、初めてアリッオナに行つた時に、「テーブルランド」の麓で、毛布に纏まつて、靑空の下に寢て居たが、何時も早朝に、牛を牧場へ連れて行くのかと思はれる盛な鈴の音で以て目を醒まされた。晝になつる見れば牛も居らぬ、どうも不思議でならぬから、或日土人に聞いて見た、毎朝牝牛を逐ふのかと尋ねると、大に嬲いたと云ふ顏付で、牝牛…牝牛などは居りはせぬと云ふから、それでは彼の鈴の音は何かと云ふた所が、笑ひ出した、牝牛、ハ、……、牝牛ではありません、何でも朝鈴の響く時に、一度起きて能く見る

がよいと云ふ答であつた。それで翌朝一つ鈴の音で起きて見た。驚くまいことか、丸裸の少年が凡そ二十人ばかり、朝の未だ小暗い中に駈け出すのであつて、各その胴に鈴を縛り著けて、十哩、十五哩、二十哩或はその倍もある處を、命令通りに走るので、後に分かつたが、これは一種の宗教上の練習だと云ふことであります。

然しこの方法に依て肺の機能が非常に善くなる、健康の源、體力、勢力の源となります。と云ふのは、酸素が大量に身體の中に入るので、血液が清淨になるからであります。吾々大都會の中に住むで居る者共は、眞の生活を知らぬと云ふても可い、その血液は常に酸素に缺乏して居るのである。生活に必要の要件を滿たして、十分の力を保つて居る人間は、何時でも大なる肺臓機能を有し、その所有する所を有益に用うる人でなければならぬ。有名な西洋のオペルの謡手、俳優、演説家などに就て調べて見るに、聲の美いものは、何れも呼吸が深く、肺力が强い者であると云ふことであります。近頃その美音を以て世界に名聲を博して居る獨逸のサラー、ベルンハルトの體格に就て記して居る所を見ますと、此の婦人は餘程の年であるが、呼吸が深く、息を吸ひ込むと肋骨が押し出される位肺を膨らし、胸と腹との境の線がなく、その身體つきは、恰もウエーヌスの如くで、腕の下から腰の處に至るまで一直線をなして居ると云ふことであります。

それで亞米利加土人の婦人には、現時の狀態よりも、その健康に注意し、肺の働や、聲の力や、一般に體力を增進せよと云ふ必要もなく、「コルッセト」を用ひやうとする程の愚物もありません。

火につきて（承前）

支那では燧人氏といふ帝が、始めて火を鑽る事を發明して煮炊の道は此時から人に敎えられたとある。燧人氏を去る幾百千年の後「女媧氏の帝の御宇に、

共工といふ神が、祝融と呼ぶ火の神に戰ひまけて、腹立ちの餘り頭を不周山に觸れた時、不周の山は忽ちに崩れて、天の柱が折れ、地の維が裂けた」相だ。天の柱が折れたといふのは、沖天の焔の形容で、地の維が裂けたといふのは、地辷り、則ち陷落地震の比喩では無からうか。不周の山は一大噴火山で、祝融氏は其火坑内に住んで居たのでは無からうか。希臘の火の神「ブルカン」も、同樣にエトナ山の火坑内に住んで居た相だ。エトナは歐州第一の活火山である。そこで女媧氏の帝が、五色の石を煉つて、破れた天をおぎない、蘆の灰を集めて洪水をせき止める」とある。五色の石云々は、噴火やゝ修まつて、滿天の黑けむりも漸く消え、恰も夕やけの青黃紅紫照りはえた姿、蘆灰しかぐは、火口より流れ出た熔岩の、漸く冷えてやゝ固まりかけた有樣を述べたのではあるまいか。

「されば共其後天は長しへに西北に傾き、地は長しへに東南に充たずして、日月の四時常に南天を運り、河川は百代たゞみに向つて流るゝ」とかいてある。日月が天頂より少しく南を通るのは、現代の學說では、地球公轉の軌道面に對するの地軸の傾斜に依つて說明せられ、北半球に陸地多く、南半球に大洋が廣い事には、地質學上の理論がある。しかし之等は火の話に餘り緣遠いから、今回は省略しておく事と致す。

日本の最上の神は日の神にておはします。希臘の最上の神ツォイスは、雷の神である。火の神ブルカン、ヘフェストスは同時に鍛冶の神で、又同じく竈の神である。天雲の上の神は自由に火を使つたが、地上の人の子は、容易に其の使用をゆるされなかつた。

希臘神話の一節を、次に引照して見やう。

不死の巨人プロメテウスは昊天の靈氛に涵されたる塊を取りて、水もて捏し、刀もて刻みて、人の子を造れり。其形容は神々に似たり。萬の物みな地にひれ伏すに、商人の子のみぞ、そが眼は天を仰ぎ

たる」。

「巨人は天に行き、日の神の御饌に寄りて、一道の天火を得たり、歸りて之を人の子の心に氣吹く、見よ、そこに溫あり、そこに生命あり、そこに力あり」。

「ツオイスの大神、巨人の偉業を嫉み、人の子を呪ひて、其火を奪ふ。人はかくて又火の用を失ひたり」。

「歎きわぶ子等に得堪えで、プロメテウスは再び日の神の火輪に行き、天火を盗み得て、葦竹の幹にかくしつ、世のうつせみにもたらし來ぬ。之よりぞ火を用ひて爲さるべき、千萬の業をば、巨人の、人の子に敎えたる。」

「ツオイスの大神、下界にて再び火燃ゆるを、見ませし時、その嫉ご憤ごは、いや強くいや深かりき。いとも妙なる、小女兒を、神々の手づから作りて、五百取の代を裝へて、岩をも笑ます嬌容を飾りて、玉篋持たせて、人の子に贈り給ひぬ」。

「香にえひ色に迷ひて、玉篋を開きし時、千萬の禍は此世にこそ出で來たれ。かくてより後、人の眼に涙斷えず、人の心に憂絕えず、悅は切那に消えて、唯血に泣く悲哀の歌、千代に八千代にひゞくなれ」。

神話は右の通りであるが、事實に於ては、プロメテウスは、石と石とを鑽つて火を得たのだ相だ。パンドラ(上の女の名)は玉手筥によつて、いゝふは林檎によつて、凡ての禍を世に齎した。我國では伊弉册神の命が、人の命をとり給ひ、美はしき木花咲耶姫の命の故に、吾々の壽命が短かいのだと聞く。之は餘事作ら、美はしき人をかしこむの餘りに。

七　其他の發火法

大古の發火法で、殊に興味あるのはレンズと、凹面鏡の應用とおでる、同じく希臘の神話中で、地獄の大王の、鐵腸をも和げたと云ふ、樂人おるふおいすの歌のなかに、水晶のレンズを用ひて、日光から火を取つた趣が見へる、レンズと云ふのは、俗に申す、蟲目鏡と全く同一物である。同じ歌曲に、凹面鏡を用ひて、矢張り日光から火を取つた事も出ておるが、プルタルクの古英雄傳に由ると、この鏡は、銀板製

の者であつたらしい。又然るべき形をしたガラス器へ水を入れて、之をレンズの代りに用ひた話もある。之は有史時代の、上古の部に屬するが、兎に角甚昔しから、理學上の智識もあり、又ガラス器を作るといふ樣な、化學上の經驗も存在しをつたと云ふ、面白い事柄の證據にならう。

因にいふレンズは直射日光（平行光線）が之を通ること、今迄とは少しく方向を變へて、凡ての光線が、或一點に集合する（之を收斂光線といふ。）此所へ木屑だの、綿だの丶樣な、燃え易い物を置くと、容易に點火して焔火を出す。之れは凡ての光線が屈折する爲、光計りでなく、熱も一點に集合するからである。又凹面鏡、則ち皿の上面が、すく鏡になつて居る樣な者では、直射日光は、反射の後、矢張り一定の點に集まる。この所ではレンズの時同樣、光も頗る強ければ、熱も頗る強い。此處に有る者は容易く焦げ出す。故に如上の點を、學問上に名けて焦點と呼ぶ。焦點の、レンズ或は鏡からの遠さは、個々の者に等しくない。凡そ百五十年前、佛蘭西の生物學者、ビユツフオン氏は、凹面鏡を用ひて、四百尺先きにある木切に、見事火を付けて見せたといふ。だから其鏡の焦點距離は、申す迄もなく四百尺である。

又申す。之で大古の人類が、初めて火を用ひ出した樣子は先づざつと終へたつもりで、此からは有史以後の火の利用に關する沿革及びつけ木、蠟燭、油脂、薪炭、十九世紀に於ける、其急激の發達、まつち、石油、石炭、石炭瓦斯、及び電氣燈の事といふ順序であるが、夏向そう／＼火の話でもあるまじと、此所で筆を擱く。

美容法（承前）

顳顬と眼の按摩

（一）眼の體操　頭を動かさずに、出來るだけ強く右の方を視る、それから左、上、下と云ふやうに視

る、次には矢張頭を動かさずに、出來るだけ大きな輪を視る積で、眼をぐるりと廻轉する、此等の運動は各十回乃至二十回づゝ行ふのである。

（二）顳顬の按摩（イ）皺に直角に、則ち眉を引延ばした線に並行に、斜に下の方に向けて順次幾つも皺を引立て、眼瞼が極僅かに引張られる程にする、此時眼は可成廣く開いて居るやうにして、骨の上にあるものを殘らず摑むやうな具合に、力を入れて揉む。これが約一分間

（ロ）一方の手を眉の上の所に置いて、その皮膚を額の中央の方に引き張り、他の手の中指で以て、耳の附根の上の處から、前の手尖の處迄楕圓形を畫くやうにする、これは前後に皮膚を辷らすよりも、寧深く壓す氣見合にするのである。一分間

（ハ）机の様なものゝ上に兩肘を支へて、兩手掌の膨隆て居る處を顳顬の處に貼てゝ、後の方に幾度も押すやうにする。

（三）眼浴　總て右の練習を終たならば、卽ち五分程かゝるが、も少し長く行ふも差支ない、又その後で一日數回、可成冷たい水に顏を浸して、水の中で幾遍も眼を開いたり閉ぢたりする。

二重頤の按摩法

これは自分では出來兼ぬるが、要領を云ふて見ますれば、術者は被術者の後方に坐つて行ふ。

（一）先づ拇指を、直角に曲げた示指とを以て、可成深く摑むで、下顎全部を規則もなく揉む。

（二）兩手の四本指を相對せしめて、平に置いて、側推に皮膚を揉む、則ち頸の全半部を左から右へ、上から下といふやうに押し揉むのである。

（三）頤の下面中央線の所に、兩手の四本指を相對して置いて、下顎に沿ふて、耳の後に至るまで、強く擦するやうに手を動かす。十回乃至二十回。

（四）拇指の頸の一側に置き、四本の指を他の一側に置いて、熊手のやうに握つて、頤から胸骨に至るまで頸を擦る。その壓す力は加減しなければならぬが、擦するのは特に注意して、押辷らすよりも寧

る撫す方の心持で行はなければならぬ、頸の皮膚は緩いもので、僅かに下に張り附いて居るからである。此の法の效驗は頗る滿足するに足るものがある。

（以下次號）

育兒

兩手利と精神の發達

身體の發育と、精神の發達とは互に調和しなければならぬと云ふのは、古から知られて居る教育上の原則であります。四肢の何れの部分が他よりも大切であると云ふ譯はない、何れの部分も等閑に附してはならぬ。凡て吾等の手足や諸器官が完全に發育すれば、それだけ能く益に立つ譯であります。これを考へると、何故人間は一方の手ばかり練習して、他の手は一向かまはずに置くのであらうと云ふ疑問が起る。即ち何故左手を練習しないかと云ふは當然起るべき問題であらうと思ふ。吾々は兩眼を以て物を視、兩耳を以て聽き、兩脚で歩いて居るではありませんか、然るに手となると、僅かにピアノを彈くとか、體操をするとか云ふ位の事は兩手を働かすが、何故總ての仕事に兩手を同様に使はぬのでありませう。此事に就ては諸學者の研究で、種々面白い説が出て居りますが、兎に角左手を發達させることの有益であると云ふことに對しては異論が無いやうである。所が案外昔の時代に於て既に此事を論じて居る人があるのであります。例へばプラトーは御承知の通り、西洋紀元前四百二十年から三百五十七年迄生存して居つた希臘の有名な哲學者でありますが、此人が既に兩手の練習を勸めて居ります。又古スキーチン人が兩手を同様に使へと云ふ法令を出したことがあります。今日の所では兩手を同様に使ふ國民とてはありません、西洋人は、單り日本人だけは今日でも能く兩手を利かす、それで日本人は萬事仕事にか

けて器用であるなど〻申して居る人もありますが、これは少々買ひかぶられて居るので、實際遺憾ながら御同様左の利く人は餘りないのであります。
又兩手利の人で、古來名高い人物もなか〳〵少なくないが、近い所で、先づビクトリヤ女王は何方の手でも同様に能く御書きになつた、アドルフ、メンツェルは兩方の手で同様に巧みに繪をかいた、右手で以て油繪を畫いて、左手、水彩畫をかいたと云ふことであります、ミケル、アンジェロー、ホルベイン、リオナルドー、ダー、ウインチー、ランドセール、其他隨分偉い人物で兩手の利いた人が澤山あります。
尚ほ此の兩手利は、小兒の精神並びに健康の身體發育の上にも大に價値あることゝ思はれる、先づ此の方面の專門家や、其他の學者たちの說を聞いて見ると、ドクトルナープル、スミスは次の様に申して居ります。兩手使用教授法は、書寫の際に於ける生徒の偏側性姿正の主因を除き、身體、腦及び其他の機能中心點の均等的發育に效あり。『ドクトル、マンフレッド、フレンケルは、左手の練習は左肺及び左眼にも益を及ぼし、又學校腦髓の精神的過勞を避けしむるものなり』と敍べましたが、ジー、リ、バーチー、タッドは下の如く唱へて居ります『何人と雖、左手使用教授法の成績を視たらむには、生徒に及ぼす、その佳良の影響に就て大に感ずる所あらん、起立の姿正宜しく、頭首を眞直に保ち、聰明の貌見るべきなり、更に余は唱ふ、左手の養成は又右手をして萬事に堪能ならしむるものなることを』と。それのみならず兩手を使ふと云ふことは吾々の精神の內部にも多少忽にならぬ影響を及ぼすものゝやうに思はれる、例へば記憶に就てジョン、ジャックソンはかう書いて居ります『兩手の發育は又腦の發育に關係す。腦髓發育の研究家は、既に久しく、兩手使用の著しく且持續的に記憶力を強むるものなることを知れり。これは一見信ずべからざるが如く聞ゆれども、而かも強記の科學者等が、想起力を強むべき、最有效の一法として兩手使用を勸むるに於て一致せること

は異なり」と。
又兩方の手を發達させることは、一般に仕事を能くし、又小兒の過勞を防ぐ一法として頗る重要なものであると云ふことは、種々の方面から申されます。
例へばドクトル、ステッケルは斯う申して居ります。「大活眼を開き見るに、若し人今に至る迄、與に只半腦を以て働きしならむには、これに倍せる精神力を發揮すべく、如何に偉大なる能力を人性に期待し得しぞ。人は小兒の精神的過勞に就て呶々し、吾人の腦髓、吾人の神經は、現代の發明の發進に堪えざることを嘆ず、若しこゝに、人生の幸福に至り得べき道の開けしならむには、如何にぞや」。
縱令一方の疲れた手を休める爲めに手を交替することが出來、これに依て確かに仕事の量を增して行くことが出來るとした所で、これは別に大した價値もなからうと思うが、勿論、專門家等の云ふ通り、兩方の手の養成は、學校の授業上大に利益があるに相違ない、今これに對する判斷を聞いて見るに、「全般の學校授業法を容易ならしむるに於て、侮るべからざる利益あり、如何となれば、兩手利の小兒は學習迅速にして、能く會得し、長くこれを保ち、萬事敏活に行へばなり、教師の勞力は少なうして、生徒は快く暫時に學習す」といふのであります。
この問題は又稍々後に至ては、軍隊の方面に於て大に利益となる、これは實際さうであらうと思ふ。ジャックソンは「總ての兵士が、劍、騎兵銃或は步兵銃を兩手を以て同樣に能く用ひ、左右互に交代するを得ば、その戰鬪能力は著しく高めらるべきなり」と云ひ、バーテンのボウェル將軍は、兩手利の價値は、軍隊上の著眼點よりすれば頗る偉大なるものあり、兵士にして左右何れの側よりも同じく善く馬に乘り、左右の手を以て、劍、短銃或は鎗を使用し、又右肩よりすると同じく迅速に且正確に左肩より射擊し得るにあらずんば、予はこれを完全に教育されたるものと爲さず」と申して居ります。
この左手の教育と云ふことは、歐米諸國で注意する

やうになる點には大部暇がかゝつたのでありますが、先づデンマークとスウエーデンでは、兒童の手藝敎授に試みたのであります。その外フィラデルフィヤ、エングランド、近頃では獨逸でも始めるやうになりました。

フィラデルフィヤには、ジー、リバーチー、タッドと云ふ名高い『左手開拓家』が居りますが、此人は既に二十五年間も千二百人程の生徒がある公立工藝學校を監督して居りまして、大に功績を顯はして居ります。同市では久しい以前から學校で雙手敎授をするやうに法令を出しましたが、就中塗板に書くこと、粘土細工、木彫等に就てゞあります。

歐羅巴ではロンドンの敎育家のジョン、シャックソンが、この問題に就て熱心に運動して居りまして、大にこれを廣める爲に『雙手敎授奬勵會』と云ふものを設けましたが、その目的とする所は、(一)總ての學校に於て一般學術上の雙手敎授法の奬勵に努むること、(二)總ての職業及び事務に兩手を均等に使用することを流布し、これに依て普ねく兩手使用の利を計ることと云ふのであります。

近頃は獨逸に於きましても。伯林の『獨逸家政學校』に於て兩手敎育を施して居りますが、これに依て女生徒を正しく均等なる姿正に慣らし、傾く癖を防ぎ、その作業能力を高めることが出來やうと云ふて居ります。

又ケーニクスベルヒではワルテル、シムソン敎授の發議で以て、同地の學校で試みに左手の特別敎習を始めましたが、文部省の許可を得て千九百六年の十月に四校に於て、習字と、圖畫と兒童手工の左手敎育實習を致すことになりましたが、一年の後に同校生徒業績の展覽會が開かれました、これを見ますと、大にその進歩を認めると共に、中には驚く程立派なものもあつたと云ふことであります。

この問題は今後何んな風に進んで行くか分かりませんが、兎に角有名な人々の贊成者もありまして、盛にその宣傳に努めて居ります。その效能と云ふのは

先づ左の通りであります。

これは、全身の相稱的完全發育を遂げ、總ての精神能力の障礙なく發揮さるゝ爲には最も有力の方法にして、左手鍊習に依て完全なり身體的調和を得、これに依て精神の調和を得べし。

汗疹の始末

目にこそ見えね汗は常に出て居るものである、只溜らぬ中に、出ると同時に皮膚から發散て什舞ふから氣がつかぬのである。酒を飲だり、熱い物を食べたり、湯に入つたり。運動をしたりすれば、玉をなして見えるやうになる、熱の出る病氣でも出る、これは身體の内の餘分の熱を除く作用であるが、平生でも汗が全く出なければ、それは病氣である、汗は小便と同じく身體の中の不要の液分を外に排泄して、旁々體溫の調子を取つて居るもので、その成分も能く小便に似て居る、而して小便と汗とは天秤の如く、冬の寒い時には汗が出ないで小便が餘計に出て、夏の暑い時には小便は餘り出ないが、その代りに汗が盛に出る、その出方は人々に依て大分差がある、又身體の部分に依て多く出る所と餘り出ない處とがある、これは皆汗を出す腺の多い少ない、又其處に働く神經の具合に由のであるが、何れにしても汗の多く出るのは心持の好いものでない、只衣服が濡れたり手拭で拭くのが煩はしいと云ふばかりでなく、それが分解すると一種不快な臭氣を放つて、身體にも毒になる。殊に夏になると著しいので、時節柄老若男女に拘らず難儀であるが、特に婦人小兒は可哀相な位である、婦人の困るのは折角の御化粧が斑になり、大事の衣服が汗に浸み、例の大きな帶を幾重にも卷いて、強く胴を絞めるのが苦しいと云ふやうな、大分自ら求めて居る苦みであるが、小兒になると強制的に、餘り價値もない行儀體裁などの爲めに、要らざる衣服を著けさせられて苦しむのである。その割合に眞正の著物たる皮膚の方は餘りかまはれな

い。實際此頃餘所に行つて、奇麗なお衣服を作して入らつしやる赤様を、可愛と思つて一寸抱いて見ると、何とも云へぬ異様の臭氣に打たれることが尠なくない、乳と尿と汗との分解腐敗したその臭が一緒になつたのである、女の子の頭もなか〳〵臭ふのがある、殊に香水や香油の匂を混ずるに至ては、いよ〳〵甚しい惡臭となる、斯様な風では禮儀も體裁もあつたものではない、のみならず其身體に害がある。小兒の軟かい皮膚は汗の刺戟で以て容易に汗疹が出來る、それをかまはずに置けば、追々澤山になつて、その中には膿を持つものが出來る、それを掻き潰せば、それが又他の汗疹に膿を移して、様々の腫物になつて非常に小兒を悩ますことになる。それ故小兒の皮膚を清潔にして置くことは何時に限らず大切であるが、就中夏は衣服も、本より清潔でなければならぬが、先づ皮膚そのものを清潔にして置くことに努めなければならぬ。家の内では、蚊や蠅の襲はぬ注意をして、腹を冷やさぬ用心をして、寧ろ可成裸にして置くが宜からうと思ふ。而して汗が出たならば、度々水に浸した手拭を固く搾つて拭いてやるか、湯で洗つてやる、但し汗を出した時、又湯で洗つた後に團扇でおほひでやるのは宜敷くない。亞鉛華澱粉のやうな刺戟の無い粉藥を撒布つて乾燥いた布か、清潔な紙で輕く撫でゝやるがよい。殊に額、胸から腋の下、背部、肘や膝の屈曲面、陰部等は注意して汗の分解して臭氣の發せぬ中に清潔にして汗疹の出來るのを豫防しなければならぬ。

尚ほこゝに一つ注意すべきことは、往々他の皮膚病と汗疹を間違へることであつて、これが爲に病氣を重くすることがある、初の間は隨分汗疹とまぎらはしい皮膚の發疹がある、私も幼少の時分から發汗の多い方で、隨分汗疹に悩まされた方であるが、一夏例の汗疹が出來たと云ふので、私の伯母に當る人が、汗疹の妙藥と稱して桃の葉を揉むで盛に洗つてくれた、所が流石の妙藥も一向效驗がない、それもその筈で、二三日の後に至て汗疹ではない、立派な痲疹

であることが分かつた、その爲であらうと思ふが、大分重く經過した覺がある、これは麻疹ばかりではない、更に危險な病氣で、最初汗疹と間違ひ易い發疹の出來るものがあるから、稍々樣子の變つたものであれば先づ醫師に診てもらふのが安全である。

全く汗疹であれば、前に述べたやうに、度々水に浸した手拭を固く絞つて拭くか、湯浴をさせて、その後撒布藥をつけて置くやうにする、湯を使ふ時に餘り石鹼を用うるのは宜敷ない、一日一回位石鹼を使ふ必要があつても、決して石鹼が皮膚に殘らぬやうに十分洗い落すやうにしなければならぬ、汗疹の澤山出來て居る所を手拭で強く擦るのも宜敷ない、寧ろ微温い湯を十分掛けて洗ひ流すやうにする、而して能く乾いた手拭で拭き取つて前の粉藥を撒布つて置くやうにしなければならぬ。

小兒の睡眠に就て（承前）

ドクトル　オイゲン、チーテル述

已に申述候通り、小兒の就眠時の習癖は中々強く、往々打勝がたき困難を呈するものに候、習癖を除き候ことは、その成立を防ぐよりも遙に六ケ敷ものに御坐候、この點よりして、倘ほ立入りて眞面目に忠告を繰返すの要これ可有候、然れば夙に小兒幼少の時(哺乳兒)より正しき就眠に馴れしめ、凡て根を張らむとする習癖は最初よりこれを防遏致し候へば、小兒、特におなた方御自身の爲めに餘程の煩累を少なくし、且屢々又直接健康上の害をも少なうすることに御坐候、こは小生の日常證明し居る所に候て、小兒にも種々差別有之候へども、この勸告はおしなべて實施し得ることに御坐候。

然らば小兒は何時ばかり睡眠せしむべきか、この問題は種々の書物にも時間數を示し居り候へども、通常思はるゝ程には必要の事とも存せられず候、然り

ながら往々守り難きは「早く寢床へ、早く寢床より」と申す言葉に御坐候。

要するにこの事の本意は、獨り時間數のみにはこれ無く候、例へば晩の十時より朝の九時迄眠るも、八時より七時迄眠り候も同じく十一時間の睡眠に候へども、その效果に至ては小兒に取りて同一にはこれ無く候、小兒は早く床に就くべしとの箴言は、兎角犯されがちに候て、樣々の事より小兒は夜分往々何時迄も寢に就かぬことの有之ものに候。元來小兒の床に就くことを好まざるは自然の勢とは申し難く、これは一考を要する所に御座候、又睡くなれる小兒が、彼のむづかる所の刺戟性に依て、その疲勞を表はすに至る迄待つべきものには無之候、宜しく適時に、則ち早く小兒を床に就かしむべきものに御座候。早くと申し候は、二歳乃至六歳の年輩の小兒にては、夏は晩の七時より八時の間、冬は六時より七時の間と心得られ度候、この際尚ほ半時間も間有之候ときは、この物六ケ敷き小山法師は寧ろ半時間早く寢床に連れ行く方然るべく候、吾々大人自身に就て考へ候うても、朝寢は餘り休まらず、只晩に早寢致し候ことのみ眞に恢復の效あることを知らるべく候。

小兒は晝は、尙何時間程睡眠致さしむべきやと申候に、これは其小兒の、身體及び精神の狀況に關する事にて、一般に適する法則を立つる譯にはまゐらず候得共、まづ二歳乃至三歳の間は、晝も尙一回眠らして然しむべく存候。この睡眠の時は、季節に依て、適當なる時間を定むるやう致すべく、兎に角小兒を多く眠らしめ候とも、過ちを來す事は稀なる者に御坐候。

睡眠の障碍は、隨分屢〻これ有る者に候へども、只今こゝに說明致しかね候へども若し此の如き障碍起り、兩親の心配に相成候やうの時は、醫師に尋ぬべき事に御座候。然る時は醫師は、此の如き睡眠中の不安は、別に小兒の神經性の症狀と、見做に足らざる事を申し得ることも稀ならず候、小兒は神經質なることを證明さるゝよりも別に惡き手段なきため

に、却て異に神經質に致し、此の如き誤まれる考へより、不適當なる療法を施すが如き、思ひ過しを慎しまざるべからず候。

小兒の睡眠に關する以上の觀察は、吾々の小兒の教育に於て、習癖に關し大なる意味あることを示し申候、凡の兩親に此の智識が漸次に普及致され候半には、小兒教育書も一層難なく容易に相成り、且つ兩親にとりても頗る容易に、且つ面白く相成ることゝ存せられ候。

小兒の夏季衛生

暑中は小兒に限らず大人でも弱りますが、一般に身體の働きが鈍くなるのに、尚ほ周圍の狀態が惡くなつて來る、卽ち諸種の黴菌類は時を得顔に繁殖して、容易に飲食物を腐敗せしめ、最も怖るべき病原菌も此時期に跋扈するのであります。それで何うしても夏は病氣が多い、殊に小兒は病氣に罹り易く、就中危險なる消化器病に侵され易いから、幾重にも注意しなければならぬことであります。

凡て身體を清潔にして置くことは、小兒に限らず、又何時と言はず、衛生上常に必要の事でありますが、時に哺乳兒に於ては、夏はその口の內、口の周圍を清潔にして置かねばなりません、卽ちガーゼの如き軟き、清潔な布に、湯又は硼酸水のやうなものを浸して、乳を飲むだ後には必ず拭いてやるのであります、又一日一回づゝ沐浴をさせて全身を清め、汗をかゝぬやうに薄き簡單な衣服を著せます、毎日洗濯した清潔な衣服に更へなければなりませんが、特にオシメは汚れたならば直ぐ取更へてやらねばなりません、これを怠ればその柔かい皮膚は、汚物の刺戟に依て容易に糜爛れ、それが又汗とオシメの刺戟に依て頑固な皮膚の病氣となつて、小兒は絶えず惱まさるゝことゝなります。

哺乳兒の身體の外に就ては、先づこの位の注意を怠つてはなりませんが、最も大切なことは何時も乳で

あります。母の乳を以て育てる分には、別に苦勞はない、只乳を含める前後に乳嘴を淸潔に拭くこと丶、脚氣の氣味でもあれば醫師の相談を受けること、離乳すべき時期であれば、これ又小兒科醫の相談を經た上にしなければならぬ、概して夏に離乳するのは失敗が多いが、これには又種々の事情があるから、必ず醫師の意見を聞いた上に行はなければなりません、先づ斯様の心得があれば宜敷しいが、扨て牛乳育ての小兒になりますと、中々面倒である。第一牛乳が配達される迄に、如何なる手を經て、如何に取扱はれて來るかゞ一つ案じられる、特に赤痢虎列刺の如き危險の傳染病などが流行する時には安心がならぬ、そこで煮て消毒をする、然しこれを晝又は晩迄取て置くときには矢張腐敗する虞がある、一旦消毒はしたからと云ふて、少しでも殘つて居る黴菌があり。又後に入つたとすればこれが繁殖して同じく腐敗させますから少なくとも罎を冷やして保つやうにしなければなりません、それのみならず、量の加減もしなければならず、隨分厄介なものであります。

而して母乳兒よりは消化器を惡くし易く、一度病氣に罹れば徐々困難になる、劇しい消化不良を起して、急に死亡して仕舞ふやうなものは、この牛乳育ての小兒に多いのであります、何れの點から云ふても小兒は母の乳で育てたいものです、これは母親も醫師も、夏になつて何時も特に感ずる所であります。

哺乳兒は兎に角乳だけであるから、乳さへ十分注意すれば宜しいが、稍々大きな小兒になりますと、中々危ない。匍出して座敷の中に遊んで居る小兒でも、迂かりすると、蚊遣線香を喰べたり、蠅の死骸を食ふたり、致しますから、油斷はなりません、さなくとも其小さな柔かい汗ばめる手には、何が著くか分りません、而かもこれが容易に顏に塗りつけられ、又口の中に持運ばれるのでありますから、度々手を拭いてやり、口に手を入れる習慣をつけぬやうに氣をつけねばなりません。

更に大きい小兒になりますと、家では嚴重に衛生上

の注意を致しましても、外に出掛けては何を致すか分りません。醫者が、腹痛、下痢を起して居る小兒を診察するときに、原因を尋ねて見ると、家の人は『宅ではもう何も惡いものは戴かせません、殊に夏分は食物も嚴重しく致して居りますのですが、何う致しましたものですか……』と云ふのが通常である、所が吐いた物や、下した物を檢査して見ると、意外にも不熟の果物や、トコロテンなどゝ稱するものを發見することが尠なくない、段々穿鑿をして見ると、友達と何處そへ遊びに行て貰ふか、買ふかして食べた、少々お腹が痛いが、云へば叱られるから默つて居たが、遂此の通りと云ふやうなことが往々ある。それで夏は小兒を外に出すにも餘程氣をつけなければならぬ、又他家の小兒に菓子や果物を與へることも随分注意しないと、折角のお愛想も仇になることがありますから考ものであります。單にその物が惡いと云ふばかりではない、其家々に依て平素の習慣が異るから、暑中などは僅か違つた飲食物に使ても、小兒はお腹の具合を惡くすることがあるからであります。或人の話に、平素家庭でも、又學校でも、決して生水を飲ではならぬと云ふことを、能く小兒に言ひ聞かして置いたが、或時山に散歩に連れて行た、夏のことで咽が渇いたものと見え、滾々として流れ來る溪川の水を眺めて居たが、やがて『先生この水は、よく煮たのですか』と問ふたので大笑をしたと云ふことを聞きましたが、まあこの位に敎へ込んで置けば可からうと思ひます。

尙ほ外出する時には、輕い麥藁帽を冠るとか、水泳も善いが、必ず敎導が監督して、その時間も正しく守らせ、耳の中に水の入らぬやうにする等衞生上の注意を怠るべからざるは勿論で、夏の小兒の衞生も、考へれば随分種々注意すべきことも出て來ますが、衞生〳〵と云ふて、張子の樣な、豆腐の樣な兒童を養成するのは快して敎育の本旨でなく、衞生の道でもありませんから、兒童の養育者、又保護者たる人々は、大體の衞生に氣をつけて、少々の害には能く

抵抗し得るだけの健康を保たしむるやうに努むることが肝要であらうと思ひます、終に、小兒には寢冷をさすなと云ふことは、昔から申すことで、實際夜間裸になつて、腹部を冷せば、或は腸に感作を及ぼして下痢するやうなこともありませう、然しこれは普通世間の人が考へて居る程仰山に言ふ必要もないことで、腹が冷えて氣持が悪いと思へば、腹卷をすれば澤山な話で、他の事は不注意にして置きながら、凡て小兒が病氣になれば、何でも皆寢冷と云ふことが原因であるかの如く謂ひ做して、丸で玉葱流に小兒を包むで蒸すのは、全く寢冷病理學の弊害で、臆病に過ぎることゝ思はれる、少し注意すれば小兒は裸にしても差支ないのである。これは餘り臆病な親公達の爲に申添へて置くのであります。

訂正　本誌第二百五十二號三十九頁、小兒の間食と云へる題下に、「生後二ヶ月間は、一時間又は一時間半毎に授乳す」とあるは誤にして、宜しく「三四時間毎に即ち二十四時間に六乃至七回、爾後六回を越ゆべからず」

こすべきなり。

右に關し私立大日本婦人衛生會特別賛成員醫學士唐澤光德氏の注意あり、次で同特別賛成員醫學士河野衛氏の遠く朝鮮より忠告せられたるあり、謹で茲に誤を訂し厚く兩氏に謝する所なり、本誌は常に此の如き熱心なる特別賛成員の監視の下にあるを幸とす。（編者識）

家庭衛生

黴菌と臺所

吾々の日常の生活に衛生の大切なものであると云ふことは、段々廣く且深く解せらるゝやうになつて參りました、近頃は何れの雜誌を見ましても、大抵衛生に關する事が掲げてあるのが證據であります。然るに衛生學の一部で、特に大事な黴菌學になりますと、これは只醫師や學者たけが研究し應用するものゝやうに考へられて居りまして、黴菌學に就て世間

の人の知つて居る所は何う云ふことかと申しますとバクテリヤと云ふ言葉を聞いて、兎に角無氣味なものと思ふことであります、而して段々話を聞いて見ると、空氣でも、水でも、土地でも何萬、幾億とも知らず黴菌が居つて、其中には結核、赤痢、虎列拉、窒扶斯、百私篤と云ふやうな怖るべき病原菌も尠くないと云ふのでなか〳〵呼吸も出來ないやうに恐氣を振はすことであります。

一應御尤な次第であるが、此等の植物や、バクテリヤの中には又吾々の生活に缺くべからざる幾多有益の種類がありまして、農業、工業、家政上にも直接間接に用をなして居ることを忘てはなりません。例へば麥酒や甘酒、酒、醤油のやうなものでも黴菌がなければ出來ないのであります。苟も文明人と稱する以上は、その有益なるものを利用し、有害のもの防禦する道を心得て置かなければなりません。

こゝには先づその防禦の方面を少しく述べて見やうと思ひます。それも病牀の方でなく、主として臺所向の方をお話致します。

寒冷に依て食物の腐敗を防ぐと云ふことは、昔から行はれて居りまして隨分古い經驗であります、今日は物の分解腐敗は黴菌に由て起されると云ふことが分つて參りました、それで寒冷に依て物の腐敗を防ぎ得るのは、黴菌の大部分のものは、低い溫度では死んで仕舞ふ、尚ほ低い溫度にも堪へ得るものでも、寒冷の作用して居る間は、凍えて仕舞つて、その生活機能を廢するからであると云ふことが明かになりました、實際普通の氷や霰や、雪解け水の中にも黴菌を證明することが出來る、天然氷の中には千三百十四個、人造氷の中には百六十四個と云ふやうな割合に黴菌を含むで居つたと云ふ檢査の例を見ます。夏はこれを以て氷室、冷藏庫に應用し、索麵を冷やすとか、刺身を冷やすとか甚しきは氷をそのまゝ削つて食べる、これは少しく考へなければなるまいと思はれます。普通の人は、氷と云へば全く清潔な物の如く考へて居るから間違が起るので、氷も矢張水

と同様の衛生上の注意が要るのであります、これまでも氷から虎列拉が始まつた例があります、これは畢竟虎列拉菌の寒冷に對する抵抗力を知らぬからのことであります。それから氷室に食品を貯へて置きますが、成程これに依て腐敗を防ぐことが出來ますが、黴菌、病原菌などの侵入することに對しては無頓着である。經驗上長く氷室に貯へて置いた食物は、一種不快な臭味を持つて居ります、完全な冷藏庫の中でなければ迚も分解を防ぐと云ふことは六ケ敷いのであります。魚を遠い處へ送るのには腸を拔いて、列氏四十度位の溫度に冷やして送る、斯うすれば先づ新鮮で居りますが、その腸を拔くと云ふことが極めて大事なことであります。これは通常臺所に於て心得て置くべきことで、肉の健康なものであれば殆ど無菌と云ふても差支ない、所が腸の中には無數に黴菌が居りまして、動物の活きて居る間は醱酵とか腐敗を起しませんが動物が死にますと、もはや其腸にも肉にも抵抗力が無くなりますから、暫時の間に黴菌が腸の外までも繁殖して肉に傳染することになるのであります、それであるから死んだならば直に腸を拔いて仕舞へば、これを防ぐことが出來るのである。併し又その皮を剝ぐとか、洗ふとか云ふ事で以て、屠殺者の手や庖刀や水などから、復び肉に黴菌を附ける機會が甚だ多いので、これが死肉の上には誠に善く發育繁殖するのであります。然るに屠殺場では其處迄は注意をしない、溫度も決して低くゝはない、これを冷やすにしても辛うじて黴菌の繁殖を止めるだけのことに過ぎないのであります。

然しこゝに又一つ方法がある、それは盛に風をあてることであります。これは何故效があるかと申しますと、肉の表面を乾かすからのことで、濕て居なければ黴菌は繁殖し得ないのであります。立派な屠場に於きましては、健康な獸肉を此方法で以て一ケ月位も保存致しますけれども、これが一旦肉屋の店に出されますと、塵埃がかゝる、蠅がつく、それに黴

菌の繁殖とも云ふべき濕氣のある物置のやうな所にでも置くときは、忽ち腐敗が始まる、これは顯微鏡で檢査すれば、既に二三時間の後に能く見らるゝ現象であります、これは買ふ人も警察の方でも十分氣を付けなければならぬ事柄でありますけれども、中々さうは往かぬものと見えまして、よく新聞に報道される魚肉の中毒、獸肉の中毒と云ふことが、これから起るのであります。

それで吾々の食料品に風を當てることは宜しいが、これには清潔な、乾いた、塵埃や黴菌の含んで居らぬ空氣でなければなりません。然らば家で用うる氷室に食物を貯へて置けば、腐敗を防ぐことが出來るかと云ふと、これも駄目と云はねばなりません、何故ならば、濕度は低いが空氣が通はぬ、その中の空氣は濕氣に滿ちて居る、これは恰も食物の腐敗を早める條件が具はつて居るからであります。食物を貯へる冷藏庫としては、空氣を通はすやうになつて居つて、同時にその空氣を濾すやうな仕掛がなければならぬ、又溫度の外に濕度計を備へて濕氣を計り、空氣は石灰で以て乾燥させる、これには完全な窖、戸棚、氷室などが必要な事であります、それには苛性加里の塊を皿に入れて隅の方に入れて置いて、壞れたならば又新に取換へれば澤山ですが、何れにしても氷室は間に合はせ物ですから、それよりも寧ろ、北向の風通の良い、木陰のある涼い室を利用した方が益である、而して臺所や食堂は日當り良い室にする。一夏氷を用うる位金を掛ければ、幾らも涼しい自然の食物貯藏室が出來ませう。

氷室と云へば順序として、鼠不入、蠅帳と云ふお話に移つて參りますが、此等は能く食物に黴菌を附けぬやうに出來るでありませうか、と申すと矢張此目的を遂することは出來ないのであります、大きな塵埃は避けます、又蟲等に不潔にされる憂は免れますけれども物を腐らす黴菌は、小さな塵埃と共に自由に通るのであります。細菌學の方で黴菌の全く居らぬ液體を貯へるのには、空中の黴菌が入らぬやうに、

其容器を綿を以て栓を致します、空氣は此綿で以て濾される譯です。或人はこれを應用して蠅帳を拵へて、大に效能があると申して居ります、即ち金網二枚の間に脱脂綿を入れて蠅帳を拵へるのであります。又皿や茶椀を暫時覆ふて置くのにも此流儀で拵へたものを應用すれば宜しい譯であります。

次に食器の蓋に就て、觀察批評を下して見ますれば、飯櫃の蓋、茶椀蒸の蓋の如きは先づ非難が無い、然し鍋の蓋、普通の茶椀、お椀の蓋は感心しない。何故なれば鍋の蓋は、これを取つて置く時には、內側の方を上に向けて置く、而して又これを蓋する時には、確かに黴菌を入れる、然ればと云ふて、內側をべたりと臺所の板の間に置かれては更に適はぬ、又その蓋の縁は鍋の內面に觸れるのである。此點は茶椀、お椀の蓋も同一轍である、そこに行くと、お鉢や茶椀蒸流の蓋であれば、御膳や卓の上に伏せて置けば、空中の塵埃や黴菌を溜めて置いて器物の內に擲げ込む憂はない、殊にその蓋の縁は、器物の縁を超へて覆ふから食物の入る所には觸れない。衛生學、細菌學の眼から見れば是非此蓋でなければならぬ。且溫度を保つことも內に落ち込む方の蓋よりは餘程勝さつて居る、エーゲルと云ふ人が、その同じ時間內に於ける冷め方を表で示したのを見ますと左の如くであります。

被覆蓋　一〇〇、五七、四六、四〇、三七度
陷入蓋　一〇〇、五一、四一、三五、三一度

これを以て視れば、食物の合理的調理及び保溫、火の儉約には何れが優つて居るか、又茶椀蒸には何故彼の樣な蓋を用うるかも能くお分かりになるだらうと思ふ。

次に吾々の臺所に於て驚くべきことは、飲食器物の洗方であります。一見茶碗お椀は極めて淸潔に洗はれて居るやうでも、細菌學の方で云ふ淸潔と云ふ意味から申せば先づ殆ど役には立たぬやうなものであります。これに就て獨逸のフォン、エスマルヒ敎授が面白い試驗を致したことがありますが、先づ總ての

飲食器具、殊に今使つたばかりのものには、無數に澤山の黴菌が著いて居ることを證明致しました。それから其器物を洗はせ（五十度の湯を以て）清潔な拭巾を以て、念を入れて拭き乾かさせまして、同じく檢查しました所が、矢張それでも活きて居る黴菌が居たのであります。そこでこれを見せしめる爲めに、エスマルヒは清潔に洗つた硝子杯の緣を、黴菌を育てる寒天に壓付けました所が、暫時にして、その寒天の上には所謂黴菌の聚落が立派に發育したのであります。これに依て見ますと、杯の消毒も餘り役に立たない。これから考へて見ると、何ぞ傳染性の病人のある家族の中で、器物を共同に使ふと云ふやうなことがあれば如何でせう、又茶椀や箸などを表面ばかり奇麗に洗ふ臺所仕舞を考へたならば何うでせう『處何から何うして始まつたか分からぬ』か、急に傳染病の發生することのあるのも敢て不思議ではあるまいと思ひます。

要するに斯樣の場合に於ける不潔は、大抵吾々が清潔であると思ひ違ひて居る所に罪があるのであります。右のエスマルヒ氏の試驗と觀察に基いて、近頃プロイセンでは早速訓令を發しましたが。それに據りますと、公共の倶樂部とか、料理屋等では、飲食器具の清潔法としては、次の如く行ふべきことゝなつたのであります、即ち總ての飲食器物は、普通の湯洗をする前に、先づ數分間五十度の一プロセント曹達溶液の中に入れて置いて、それから更に通常の洗方をせよと云ふのであります。兎に角學術の應用は仕事を簡便にするものでありますが、この位の骨折は家政上別に難儀と云ふ程のことでもあるまひと思ひます。吾々に取つて健康と云ふものは何の位大切であるかと云ふことを考へなければならんのであります。

以上は凡ての學術は實際上に於て何かにと有益になるもので、斯樣にして吾々の生活は漸次學問上の成績と一致して來ると云ふことを述べた迄でありますが、若し學問が生活に用をなさず、生活が學術を利

用しないならば、學問は無用のもので、その人民の生活は、尠くとも今日の世の中では時代遅れにならざるを得ないのであります。只學問の爲の學問と云ふことは、今日では最早通用しない考へで、適者生存と云ふのは世界を支配すると云ふ生物學上の言葉でありますが、右に述べたことも畢竟人間が其存在に出來るだけ完全に適應して行かねばならぬと云ふことを宣傳するの意に外ならぬのであります。

雷の怖さ

昔より地震、雷鳴、火事、爺とか云ひて、雷は世の恐ろしきものゝ第二位に數へられたるが、この頃は又洪水も恐しきものゝ一つに數ふるやうになりぬ。その何れか果して恐るべきものゝ第一なるやは容易に定むべくもあらず、惡き事して叱らるゝ時は、爺てふものばかり世に恐ろしきはなしとや思ふらむ、羹に脣を燒きては膾をも吹くの譬にて、偶々世に起る災を見聞くにつれて、實はさばかり恐るべくもあらぬものをいたく怖ぢ惑へるもありぬべし。

地震、火事もさることながら、おどろ〱しく鳴りはためく雷こそ恐しげなるものゝ第一なれとて、遠つ方に破れ太鼓のやうなる物音の聞ゆれば、早くも顔色を變ふる人少なからず。然れど眞には如何ばかり恐るべきものぞ、いでや鳴る神の太鼓調べ見むか。

鬼の形したるものゝ數多の太鼓打鳴らしつゝ天翔ると云へるは既に昔にて、地震ふるはす大鯰の地下に潜めりと倣せるとの愚かしきが如く、こもまた云ふにも足らぬ戲言となりはてゝ、繪にもかゝずなりぬ。反りて鳴神を捕へて文の使とし、話の言傳に、はた常夜燈の火ともし人足にさへ使ふことゝはなれり。空掻き曇りて息さへ苦しく蒸暑きに、刃の如く、火の蛇の如く電飛びちがひて、天地も裂くるかとばかり鳴りはためく雷は、實に恐ろしく覺ゆれどその音はマッチ擦る音の大なるが如きのみ、聲は如何ばかり大きく高くとも、耳だに損せずば何の災があら

ん、只恐るべきは電にこそ。人の雷に撃れて死することあるは此の電の身に傳はりて死するなり、電車の架空線の斷たれたるに觸れ或は電燈の紐の絶縁のほごれて心の露はれたるに觸るゝも同じ理なり。彼のけ恐ろしき音は空氣の急に動きて摩れ合ふが爲のみ。

然ども雷烈しき時は、心せざるも賢こきにあらず、家並繁き街の中は危險少なけれど、木立もなき野道は危し、雨宿せんにも直ちに大きなる木の下に立やすらふべきものにあらず、必ずそこばくの隔りを置きて在るべし。窟あらば其中に入り、或は谷合に潜むべし、土橋の下にても露なるよりは頼あり。金物の尖端に附きたる傘を翳すは大に忌むべきことなり。金屬の簪の如きものも電を引く虞あり、心すべし。

家の中に在りては、殆ど安し、殊に避雷針の設けある屋の内に在れば憂なし、但その備全からでは反りて危きこと限なし、銅もて包める家の中にあらば全く雷の災を免るゝことを得べきなり。家の中にして雷に撃たるゝこと甚だ稀なれども、尚ほ二階建の家なれば下の室に居るべし、凡て低きに在るを宜しとす。立つよりも坐れるが善く、坐はれるよりは横はれるが善く、三階よりは二階、二階よりは最下の室に居るを可とす。壁柱に倚るは忌むべし、室の中程に居るべきなり。いたく雷を恐るゝ人の蚊帳を吊りて、その内に入り、線香を焚きて、桑原〳〵と唱へつゝ身を縮めたるは、稍々理に適へる節もなからず、頭より厚き毛布打かつぎて、盛に焚火したらんには更にその驗多からむかし。剪、小刀の類を包み隱すとも甲斐なし、只電するほどは斯るものを手にすべからず。

凡そ右に述べたる事共を心得置かんには、雷烈しき折は幾干か頼たるべし。然はれつく〳〵考ふれば、一夏に幾度か雷の鳴るべき、鳴れる時幾度か落つべき落ちたる時幾人かこれに感ずべき、感ぜる人幾干か死すべき、これを思へば雷を恐るゝは殆ど理由な

きに似たり、或は水に溺れ、或は汽車に引かれ、或は崖に壓されて死する人は日々に聞けど、雷に撃たれて死する人はいとも稀なり。これを人數に割り當て、死ぬる人の割合に見るも、殆ど數の端にも上らぬことぞかし。戰の場の彈丸の中に在りてさへ、これに中りて死する人の數は餘り多きものにあらず、況や稀々に落つることある雷のさばかり怖るべきことかは、これをしも恐れ慄かば、屋の内にも、地の上にも安き心はなかるべし。且思へ、如何に烈しくとも、雷の音の聞ゆる間は吾身の安全なることを、雷の聲は既に危き電の過ぎたる後にこそ響くなれ、吾身の擊たるゝ時、何の遑をか聞かむ、人は卒中症にて斃るゝものゝ死を幸なりと謂へり、然らば電擊の下に此世を去る人はその死に於て更に幸多き人と云ふべきならずや、其死は何の苦もなく、全く健かにして、直ちに白玉樓中の人となり得べき最も淸淨の死なればなり。雷を怖るゝこと甚しき人の爲にこれを云ふ。

中毒の際は如何にすべきか

中毒と云へば、先づ通常混蟲に螫されるとか、毒蛇に嚙まれ、恐犬又は恐犬病の疑ある動物に咬まれて、その創口から毒が廻はつて病狀を呈するもの中毒である。

毒蟲に螫された時には、直ちにアムモニヤ水を其處に滴して、腫れた場合には、水或は二%の鉛糖水又は醋酸礬土水の如きもので罨法を施せば大抵これで十分である。

蛇毒に對しては、先づ第一にその這入つた毒を除くことに努めなければならぬ、それには尠くとも一部分血を出して、盛に水を以て洗ひ、若し唇に傷のないことが確かならば口を以て吸出すのである。第二には、その毒が血管や淋巴管を通つて全身に廣がらぬやうに、且つその毒を薄めて弱くする工夫であるが、これには足なり手なり、嚙まれた部分の上の方即ち心臟に近ひ方を縛る、例へば足跡を嚙まれたな

らば足首或は膝の下の所、手ならば、手首又は肘の上の部分を縛るのである。縛るのにはゴム帶、ゴム紐或は彈力性のズボン吊などが最も適當である。然し餘り長い間紐や布で縊つて置く譯にはゆかぬ。勇氣を鼓して煙草の火なり、マツチの火を以てなり直ぐ樣そこを燒くが可い。

第三には酒なり燒酎なり酒精性のものを與へて、嚙まれたものゝ抵抗力を強めるが可い、これは經驗上確かに善いことである。

次には恐犬病の疑ある動物に咬まれた時にも、蛇の時と同じやうな方法を講ずる、而して咬まれてから數分間も過ぎた時には、止むを得ぬから先づ其の創口を燒火箸で燒くか、強い硝酸などを塗るけれども、これと同時に、最初に救ふ者は、可成速かに患者を然るべき病院に送つて、注射をしてもらうことを怠つてはならぬ。一方に於て、その疑ある犬はこれを直ぐ打殺してはならぬこれは、十分觀察することが必要である。その動物が尚ほ二週間以上も活きて居るやうであれば、これは恐犬ではないと云ふことが分かる、大抵犬の病氣の間は二日から五日位の間のものである。適當の時期に注射を施すならば、その不幸の結果を見るのは僅かに千人に一人位のものであるが、犬、猫、狼などの恐犬病に罹つて居る動物に咬まれて、接種しないで置けば、種々の手當を施しても尠くとも一割或はもつと以上の死亡數になるのである。

第二の中毒の主なるものは毒物を飲むで起るもので、この中には腐蝕性の毒と、麻醉性の毒とがある。腐蝕毒に由る中毒の症狀は何んなものかと云ふに、往々口の周圍に燒痕がある、即ち腐敗した所である。それから口も咽頭も唾液腺も、胃も腹も烈しく痛んでむかついたり、嘔吐したりする、而してその吐いた物は往々血液を混じて居る、氣は確かである。斯う云ふやうな症狀は、砒素、昇汞、修酸、鹽酸、硝酸、硫酸、石炭酸、燐、リゾール、硝酸銀などを飲むで起る、その他苛性加里の如きアルカリーでも起

る。

麻醉性の毒に由るものは如何なる症状を呈するかと云ふに、昏迷して意識が無くなり、呼吸の障碍して鼾をかき、振顫を起し、精神が錯亂し、瞳孔は或は甚しく小さくなり或は非常に大きくなる。

かう云ふ毒は如何なるものかと云ふと、阿片、モルヒネ、クロ、フオルム、アルコール、毒蕈、曼陀羅華、非沃斯草、矢鳩答、ストリヒニン、青酸などである。

手當をするときに、氣を付けなければならぬことは、燐や綠青や、カンタリヂンの中毒の時には、決して牛乳や油類を與へてはならぬことである。

中毒して苦んで居る者を救ふのには、先づ第一にその毒を出來るだけ外に出さして仕舞ふことである。これには水、牛乳、油、バタなぞを飮ませ、鳥の羽などを以て咽喉をくすぐつて嘔吐せるのであるが、大概飮むだ液體は出て來ないものである、高々植物の固い部分、菌、木の實、木の葉などが外に出て來る位のものである。且腐蝕性の物で中毒を起した場合には強く嘔吐させることは出來ない、妄に嘔吐運動をすると胃や腸が破れることがあるからである。

第二の方法としては可成毒を薄めて、幾分か無害にすることである。それで中毒して居る者に多量に液體を飮ませる、卽ち水或は牛乳の如きものを飮ませるが、最も宜いのはお茶である。咽喉や胃や腸の粘膜を保護する爲には、腐蝕性の物を飮むだと見たならば直樣粘液性の液體、例へば蛋白水（五合の水に白味五乃至六個）、水を油の如きものを飮ませるのである。

第三には、反對の藥で以て、直接にその毒を無害にして仕舞ふ。例へば酸性の中毒にはアルカリー性の物（曹達、灰、マグチシヤ、石灰水或は石鹼水の如き物）を與へれば良い、卽ちこれで以て酸の働を打消して仕舞ふのである。

これと同じ譯でアルカリーの中毒の時には弱い酸（酢、橙の汁、澤山の水で薄めた鹽酸等）を與へれば

良い。

人事不省の手當は、濕手拭を顔に當るとか、人工呼吸を施すとか、芥子を貼るとか普通行はるゝ方法を用ひなければならぬが、一般に中毒に向て最も效能のあるのは胃を洗ふことである、尤もこれは醫者でなければ出來ない仕事である、それで出來るだけ適當な怪しくない手當をすると同時に醫師を招ぐべきは勿論であるが、使をやる時には、可成詳しくその見たゞけの様子で如何なる物の中毒らしいと云ふことを知らせなければならぬ、さうすれば早速適當な藥が間に合ふて、幸一命を取止めることも出來るこ云ふ譯である。

洗濯法講義（承前）

講師　瀧浦潭

第四　カラー及ホワイトシャツの洗濯

カラー、ホワイトシャツの如きは、濃き糊を要するものにて、其糊付の方法に種々あれども、家庭に於ては可成簡單なるを宜しとせむ。

洗ひ方は、前回に述べたる白き綿布の洗濯法と同一にして、カラーは其儘濃き生糊の液中に入れ、十分に揉みて糊を內部に入るべし。糊の濃さは、普通の銀生麩ならば、一升の水に七十匁位を溶かして用ふべく、乾きたる生麩は同量の水に四十五匁位を適度とすべし。次に表面をふき取りて、暫時乾きたる布に卷き置き、適度に熱せる鏝にて仕上ぐべし。ホワイトシャツに於ては一旦乾かして後、襟、胸、カフスの所をつまみて、之に右同樣の生糊を附して仕上ぐるものなり。

以上は生糊仕上けと稱するものにして、上りの手觸り柔にして、艶なきものなり、家庭に於ては此方法を適當とすべし。さて更に硬き仕上げを好むときは、カラーの如きもシャツと同樣に、初めに乾燥して後、煮糊の中に揉みて、糊を入れ表面をふき取りて、再び乾燥せしめ、次に生糊の液中に浸して、乾きたる

布に包み暫時にして後、鏝を以て形を正しつゝ固むべく、次に引き糊（生麩又は高糊に少しく膠を入れて煮たるものなり）を引き、ふき取りて艶鏝を以て擦り艶を出すものなり。こは普通に市内の洗濯所が營業として行ふ所のものにして、家庭に於てはかゝる手数を要する方法は行はれ難かるべし。

第五　洗ひ張り其一（板張法）

實習品　銘仙縞又は絲織壹反

材料及用具　盥、洗ひ板、石鹼、ソーダ、ブラシ、張り板、布巾、布海苔

白色綿布類は度々洗濯するの要あるが故に、多くは仕立ての儘丸洗ひをなせども色ある普通の日本服は、縞綿布、銘仙、絲織、其他の絹布類に至るまで、解洗ひを以て結果良好なりとす、解洗ひに於て最も簡單なるは板張法なり。

盥に水を充て、之に洗濯物を浸して全面に水を潤ほし、之を板の端にたくり上げて、盥の水に少量の洗ひソーダを溶かし入れ、再び品物を盥の中に入れ、洗ひ板を盥の上に渡し此上にて、一端より順次汚點の部分に注意しつゝブラッシにて洗ふべし、表を終れば次に裏を簡單にブラッシ掛けして、汚たれる水を捨て、清水若くは微温湯を充たる盥にて振り洗ひ、猶二回水を代へて十分に濯ぐべし、若し品物より色の出る場合にはソーダを入るゝことなく、且最後の水に醋酸少許を加へて色止めとすべし、かくて輕く絞り上げ竿にかけ乾かすべし。

次に板に張るには、先づ板を拭淸め、洗布は中表に疊みて、適度の濃さに造れるふのり液に浸し、のりを全面に潤はしめ輕く絞りて、板の上に運び、張り板の縁を定木として、布目の曲らぬ樣に張り進むべし、此際表は外となることなれば、表面に附着せるノリを平均せしむる爲に、濕れるブラッシにて刷き、更に布巾を以て拭き取るべし、拭き取りを丁寧にするほど艶のよくなるものなり、かくて乾き上れば仕上げとなる。

色の弱きもの又は特種のものは表を板の面に觸るゝ

様に張ることあり、かゝる場合には布を水に潤ほして、板に張り糊を其上に刷きて乾かすものなり。

第六　洗ひ張り其二(伸子張法)

用具　糊刷毛、張り棒、綱、伸子等の外前回の用具總て、

伸子張り仕上げは板張法に比し更に優良なる結果を與ふものなり。先づ洗布を洗ひて乾かすこと、前回と同一(只伸子張の場合には端縫ひ置くのみ)にして布の兩端に別の切れを縫ひ附け、之を以て柱より柱に張り、先づ縫目々々に伸子を置く、(普通次に表とすべき面に伸子を張るなり)次に全面に水を引き、次にノリを引きて、よく平均にノリを伸ばし、凡一寸置きに伸子を張るなり、さて一旦乾きたる上、今一度全面に水を引きて糊かすを去り、再び乾きたる時は、最後に耳の所に少しく水を引きて、半乾きの時伸子を外すべし、次に伸子山を直しつゝ、卷き板に卷きて仕上げとするなり。

第七　絹類の洗濯

白半襟、絹ハンカチーフ、白縮緬等は不良の石鹸にて洗濯するときは、次第に色赤ばみ、光澤の損するものなれば、常に良質石鹸即ちマルセル石鹸の類を使用し、ソーダを使用せざるをよろしとす。濯ぎの終りに稀き酸性亞硫酸ソーダの液中に通し、之を溫湯にて濯ぎ上ぐるときは結果最よろしきものなり。白縮緬の靑味付は斑の出來易きものなれば、靑味液を可成稀く作りて、度々に望みの濃さにまで靑味付けを行ふべし。

友禪染などを洗濯する時には、可成洗液を多くして、布と布とが密接せぬ様になし、手早く垢を落して急ぎて濯ぎに、色止めを行ひ、別に長き白木綿風の布を伸べて其上に洗ひたる友禪を置き、二枚を重ねて卷き取り絞りて乾かすべし。

第八　湯伸し

縮緬類は是非湯伸し仕上げをなさゞるべからず、湯伸しを行ふには、切地の兩端を縫ひ接ぎて環狀に作り二本の棒を以て兩方に引き張り、蒸氣の上に通す

ること質地に就きて練習するを肝要なりとす。湯伸しは縮緬の如きものは巾を出す樣に左右に振りつつ、餘り強く引き張らずして行ふべく、博多帶地の如きは強く兩方に引き張りて行ふべし、銘仙、絲織等其々適當の手心を要するものなり。

第九　しみ拔き一斑

用具及材料　ブラッシユ、小さきサヽラ、朴又は櫻のしみ拔板(大さ二尺に七寸位)、小鍋、揮發油、醋酸、修酸、マルセル石鹼、酸性亞硫酸ソーダ、カルキ、アムモニヤ水、過マンガン酸加里、亞鉛末等

衣類　全部の汚れを去る仕事を洗濯と云ひ、其一部の汚れを去る仕事をしみ拔きと云ふ、洗濯には多くの勞力を必要とし、しみ拔きに於ては勞力よりも熟練の智識を最も必要なりとす、從つてしみ拔きに關して理論めきたる事柄を書き立つるは卽ち多くは空論に陷るものなるが、今間違ひなき簡單なる方法のみを記すことは次の如し。

鐵錆　普通に修酸を以て之を去る、其法、熱湯に修酸を溶かして、其中に錆の部分を浸し、僅かに振り動かすべく、しみ拔けたる後は十分に水洗すべし。

油じみ　揮發油を附して、揉むをよろしとす、單に揮發油を附け吸取紙などにて吸取らす如き方法にては、往々揮發油の浸み行きたる小口に環線を表はすものなり、地質に差つかへなき限り揉み落すを良法とす。

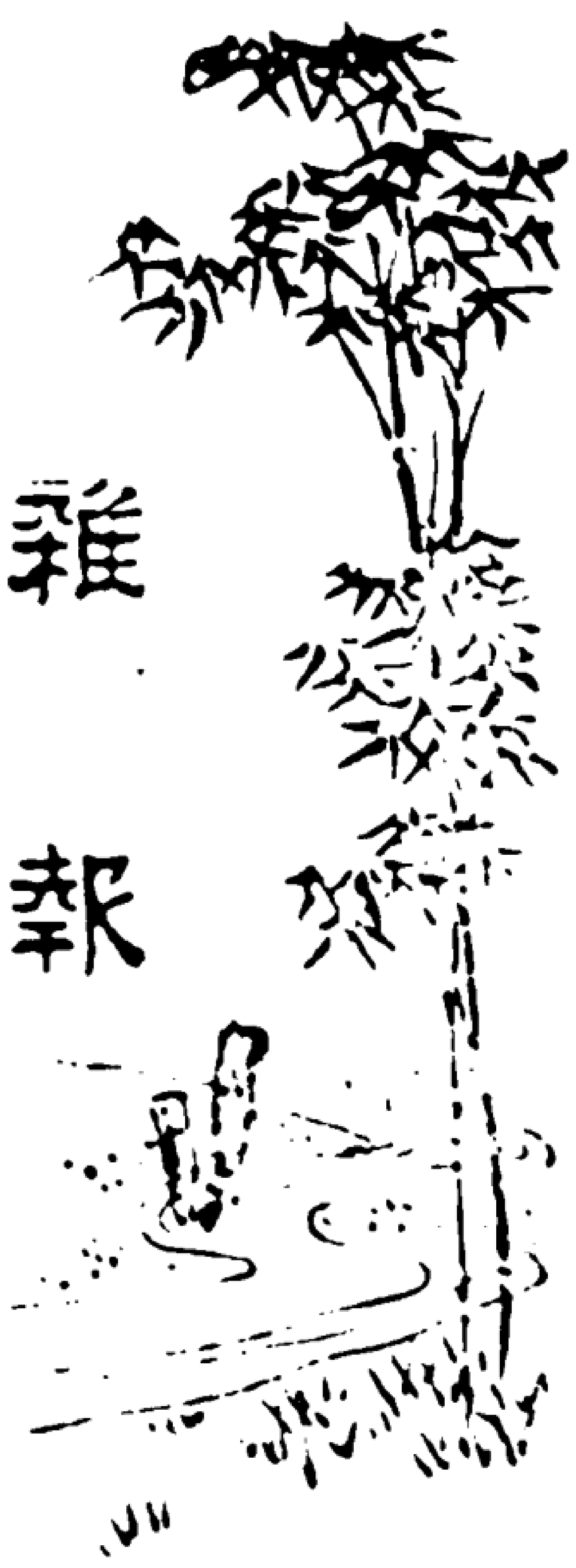
インキじみ　黑インキは大抵修酸とアムモニア水とにより略見えなくなるまでに去り得べし、卽ち先づ熱き修酸液に浸し、小さき刷毛にて靜に擦り、一旦水にて洗ひ三倍位に薄めたるアムモニヤ水に浸して洗ひ試むべし、然るときは初めに黑味と茶味を去り、第二にて青味を去り得るものなり、赤、紫等のインキは附きたる品が絹、毛等なるときは多くは成功し難く、木綿、麻などの場合は石鹼にて洗ひ落ち盡さざるときはカルキにて晒すべし。

性質の分らぬしみ　此種のものは先づブラッシにて

掃きて試み、取り去り難き時は食パンの中味にて摩擦すべく、猶落ちざるときは揮發油にて試み、之れにても猶去り難きときは水又は溫石鹸液にて行ふ。併し石鹸液を用ふるは大に考ふべきことにして、時々もとのしみよりも更に大なるしみを作るの失敗を招くことあり。(以下次號)

體温の測り方 (水前)

近頃の檢温器は大抵マキシマル檢温器と申しまして、中の水銀が體温の一番高い所迄昇つて、其處に止まつて體温を示して居るものですが、これは直ぐその時に度數を書き留て置くやうに致さなければなりません。檢温器を插むで置く時間は大約十五分、近頃の檢温器は僅かに一分間で澤山のもありますが、然しこれも五分間は插むで置なければあぶない。而して檢温器を用ひます前後には必ずその頭の所を持つて四五度急に振り動かして、管の中の水銀を下の方へ下げて置かなければなりません。又用ひた後には必ず消毒液で拭て置くやうにしなければなりません。さうでないと第一不潔になりますし、腋臭の臭が移つたり、場合に依ては皮膚病又は其他の傳染病もこれから感染することがあります、體温は表を作つて、その測つた日、時刻の、下に書きつけて置きますが、尚ほこれと同時に食事、便通、藥を用ひた時間、其他何なりとも病人の狀態について變つたことがあれば記きつけて置き、醫師が廻診に來た時に尋ぬべき事なども忘れぬやうに一緒に記して置きますれば、病人の爲にも醫師の爲めにも大に便利を得ることであります。醫療器械店に參りますと、體温、脈搏、便通、備考などの欄を設けた表を賣て居りますから、それに記して置けば頗る便利ですが、檢温器や熱型表等を求むる時には醫師に賴む方が安全であります。



雜報

○按摩の檢定試驗

此度按摩術、鍼術、灸術營業者に對する取締規則が出來て、來年の一月一日から實施される事になつた、卽ち

按摩術（マッサージ術も含む）鍼術、灸術營業を遣らうと云ふ者は、營業願書に試驗合格證書か又は地方長官の指定した學校或は講習所の卒業證書を添へて願出で、地方長官の免許鑑札を受けなければならぬ、そして地方長官の指定學校と講習所の卒業者は別として、其他の人は一定の試驗を受けて其の合格證書を得なければ營業免許下附の願出でが出來ない事になつたのである。

此の試驗では、按摩術には甲乙二種の試驗があつて、甲種は四ヶ年以上按摩術を修業した者に限り受け得るもので、其試驗課目は左の如くである。

人體の構造、主要器官の機能、按摩方式、身體各部の按摩術、消毒法大意、按摩術の實地

次ぎに乙種は盲目按摩に限るので、按摩術實地と右甲種の科目に就いて簡易な試驗を遣る、此れも二ヶ年修業の履歷がなければ駄目である、又た鍼術灸術業者は何れも實地に四ヶ年以上修業したものに限り、左の科目を試驗する。

人體の構造、主要器官の機能、筋と神經と神經脈管の關係、身體各道の刺鍼法、灸點法、經穴及び禁穴消毒法大意

無論鍼術を施す時は消毒せなければならぬ。

○昨今の傳染病

先頃來稍著しく流行し初めたる腸窒扶斯及び赤痢は、昨今益〻激烈を極めんとする模樣あり、一日二十名內外多きは三十名以上の新患者を出だし、市內に於ける總患者は、駒込病院に腸窒扶斯百七十四

名、赤痢七十六名、合計二百七十七名其他私立病院に百九十二名、自宅療養四十四名、通計六百六十九名に達せる由、其中腸窒扶斯は芝、淺草區にて百二十名以上、神田、日本橋、小石川、下谷區にて九十名以上、又た赤痢は麻布、本郷區にて四十六七名を出し、其他の各區とても決して油斷すべきにあらず、此の際飲食物の衛生上の注意が最も肝要である。

○結核豫防設備

内務省にては、肺結核病取締に就き、是が豫防方法として、明年度より各府縣をして核結病に對する豫防設備を爲さしめ、國庫より幾分補助を爲す筈なるが、此經費總額は、癩病院補助費が全國二萬人に對し五萬圓の割合なれば、結核患者全國を通じて三十萬人とし、少くとも三十萬圓を要すべく、明年度の豫算に計上し議會の賛同を求むべしと。

○不良の飲料水

時節柄サイダー、ラム子等の飲料品には餘程注意しなければならぬ事であるが、其筋の調に依て時々品質不良のものゝ發見さるゝのは布袋サイダー、山吹サイダー、月印サイダー、巴印サイダー、葡萄ラム子、旭ビーヤ、改良ビーヤ等で、特に寄席、劇場、公園の露店などに並べてあるものは頗る不良のものが多いから氣を付けねばならぬと云ふことである。

○パラチフス

法定の傳染病は、これ迄腸窒扶斯、赤痢、虎列拉、實布的里、ペスト、痘瘡、猩紅熱、發疹窒扶斯の八種であつたが、今度更にパラチフスと云ふものが腸窒扶斯と同様の豫防方法を施すべき傳染病と指定されて九種傳染病となつた、このパラチフスと云ふものは其病原菌も症狀も殆ど腸窒扶斯に同じであるが少しづゝ異る所がある、而して腸窒扶斯よりは輕いもので、早く手當をすれば大概癒るものである。

○女子大學生結婚數

日本女子大學校卒業生にして、最近に結婚せる者の數を示せば左の如し。

家政學部一回生五十八人中	二十九人

國文學部一回生五十六人中	二十八人
英文學部一回生五人中	三　人
家政學部二回生六十八人中	四　十人
國文學部二回生四十三人中	二十一人
英文學部二回生四十人中	七　人
家政學部三回生七十四人中	三十二人
國文學部三回生四十人中	三十三人
英文學部三回生十六人中	五　人
家政學部四回生八十四五人中	四十一人
國文學部四回生四十四人中	二十一人
英文學部四回生八人中	四　人
家政學部五回生百人中	四十六人
國文學部五回生四十人中	十　六人
英文學部五回生十五人中	十　一人
家政學部六回生七十一人中	二十八人
國文學六回生三十六人中	九　人
英文學部六回生二十一人中	九　人
教育學部一回生四十七人中	十　人
家政學部七回生八十二人中	十　八人
文學部七回生二十三人中	二　人
英文學部七回生十八人中	二　人
教育學部二回生三十三人中	五　人

この他に、本年家政學部六十五名、文學部二十三名、英文學部十一名、教育學部二十二名は、何れも結婚未知数なるも、要するに千百二十名の卒業生中四百三十名の結婚者にして、即ち約四割なり。

○畜犬嵌口具の廢止

東京府下には狂犬續發して相變らず危險であるが、實際嵌口具は用ゐてあつても、申譯ばかりのものが多く、且犬にも苦痛を與ふることが多いからと云ふので警視廳令中の箝口具と云ふのを削つて口網だけにせられ、去月二十日から實施されたが、違背者は所罰されると云ふ、而して此の廳令の改正と同時に畜犬飼養者には左の注意書を頒布されたと云ふことである。

▲狂犬病豫防ニ關スル注意

狂犬病ハ犬族固有ノ傳染病ニシテ最モ多ク犬族相互ノ間ニ傳播スルモノナレドモ、本病ニ罹リタル犬ハ好ンデ人ヲ咬傷シ、其ノ際津唾中ノ病毒ハ創口ヨリ人ノ體內ニ侵入シ、被咬傷者カ速カニ豫防注射ヲ受ケザリシ場合ニハ必ズ發病シ、其容體ハ狂犬病ニ罹リタル犬ニ毫モ異ナラズシテ、苦悶ノ

狀實ニ見ルニ忍ビザルノミナラズ一旦發病スレハ其ノ人ハ必ズ命ヲ殞スニ至リ、洵ニ恐ルヘキ疾病ナリトス、警視廳ノ調査ニ據レハ、本年一月以來、狂犬ノ咬傷ヲ受ケタル者ハ、府下ニテ二百十四人ノ多キニ及ヒ、其ノ咬傷シタル犬百八十一頭ノ中、野犬八十一頭、畜犬百頭ニシテ畜犬ノ數野犬ニ比シテ却テ多キノ一事ハ、飼犬者カ自他危害ノ豫防上、此際一層ノ注意ヲ要スル所ナリ

本月二十六日警視廳令第十二號ヲ以テ、去ル明治四十二年四月同廳令第十一號「狂犬豫防ノ爲メ畜犬ハ其所有者又ハ管理者ニ於テ繫留スヘシ適當ノ柵圍內ニ在ル者戶締ヲ爲シタル家屋內ニ在ル者又ハ口網若ハ嵌口具ヲ施シタル者ハ此限ニアラス」トアル中ノ「若ハ嵌口具」ノ數字ヲ削除シタリ、從來ノ廳令ニテハ、畜犬ニ口網又ハ嵌口具中、其ノ何レカヲ施セハ、放飼シテ差障ナカリシカ、實際ノ狀況ヲ見ルニ、口網ヲ施セル者ハ極メテ少ナク、好ンテ嵌口具ヲ用ヒ居レリ、而カモ其嵌口具ヲ施シタル畜犬ニシテ、猶往々人畜ヲ咬傷スルモノ頗ル多キハ、全ク嵌口具ノ製作不完全ニシテ、例ヘバ嵌口具ノ直徑犬ノ口頭ヨリ遙ニ大ニシテ、開口ノ自由ナルモノアルニ依ル、又革紐ノ類ニテ犬ノ鼻上ヨリ下顋ヲ強ク緊縶シテ其呼吸ヲ妨ケ、徒ニ犬ヲ苦シムルニ過キサル者アリ、要スルニ是等ハ唯タ體裁タルニ止マリ、毫モ咬傷豫防ノ目的ヲ達セサルノミナラス、却テ一部愛犬者ノ誤解ヲ招クノ虞アルヲ以テ玆ニ嵌口具ヲ廢シテ口網ノミヲ用ヒシムルコト、ナセリ

尙改正後ノ廳令ニ就キ注意スヘキ要點ヲ列擧スレハ左ノ如シ

一、畜犬ヲ繫留シ置クコト（從前ノ通）

畜犬ヲ繫留シ置カサル場合ハ

一、畜犬ヲ適當ノ柵圍內ニ置クコト（從前ノ通）

二、畜犬ヲ戶締ヲ爲シタル家屋內ニ置クコト
（從前ノ通）

三、畜犬ニ口網ヲ施シ置クコト（從前ハ口網又

ハ嵌口具ヲ施シタリ）

四、嵌口具ヲ廢シ口網ノミヲ施スヘキ施行期日ハ來ル七月廿日ナルコト

○看護婦會取締願

都下看護婦の數は隨分多數であるが中には技能、經驗に乏しく殆ど名ばかりのものありて、種々不都合を來し漸次看護婦の評判を惡くすると云ふので、看護婦會主が三名程連署して、當局に向て左の如き取締規則を制定されむことを願出たと云ふ、參考の爲にそのまゝを掲載する。

由來看護婦が其職務の性質と經濟の關係とに依り各自獨立の門戸を張て其業に從事するを得ざる以上之れを需用する者と其需用に應ずる看護婦との聯絡調和を計る可き相應の設備を要す看護婦會は實に治病衛生上此の兩者の意思を疎通し雙方の利害を調和するの機關として社會に存立するもの詳らかに之を敍ぶれば看護婦會は即ち醫院又は病家の依賴に應じて看護婦を撰定し之を派出して專ら病者看護の任に膺らしむるを目的とし始終看護婦を感化督勵して其職責を盡さしむるは勿論平素言行を愼み品位を墜さざらん事を努むるを第一の要素となすさすれば大體に於て看護婦一般の取締をなすは明治三十三年七月東京府令第七十一號の條規に據る可きも其職務に服する上に於て看護婦各自の取締をなすは則ち當然看護婦會の責務に屬し隨て其看護婦會を經營し看護婦の指揮監督の任に膺る者は必ずや自ら看護婦の資格を有し斯道に練達したる者ならざる可からず然るに從來法令の上に於て看護婦會を認めざるの結果之を經營するに何等の制規なきを以て何人と雖ども任意に之を營むことを得爰に於てか近來生存競爭の愈々劇しきに從ひ特に東京市の如き滿都到る處看護婦會を經營するもの次第に滋々多からんとするの趨勢を示し或は看護婦たるの資格經驗なき者にして看護婦の操縱業務の指揮に任じ或は何等の素養なき者を患家に派出して不當の料金を請求し或は偽りに看

護婦を需要すること最も多き醫院に運動し日當の低きと位置の僥きとを競ひて勢利の獲得を希ひ甚しきは看護婦會の名下に賤業を營みて風紀を壞亂するが如き情弊を釀し玉石混淆薰蕕同器延ひて同業の各信用を汚損し衆口金を爍し讒積骨を毀つの極往々看護婦會を目し雇人周旋業と同一視するものあるに至る其看護婦會の本旨を誤るの甚だしき一に何んぞ此に至るや如今看護婦會の所在に勃興し個々特立して更に相關渉するなきや啻に看護婦會其者の弊害を助長する而已ならず看護婦會を組織する會員即ち看護婦の如きも亦た現に看護婦會に有るまじき行爲をなし又は爲しつゝある者に對し縱令或看護婦會に於て之を除名せしむるとするも尙他に綽々生存の餘地を存し更に之を淘汰し制裁するに由なきが如き弊害を伴ひ乃ち兩々相駢ひて社會に害毒を流布す而して其社會に害毒を流すや宛然黴菌の肝肺を犯すに酷似し其表徴顯然的確ならざるも冥々隱微の裡世を毒し人を賊するの甚しき眞に意料の外に絶す若し夫れ今にして亟かに其弊竇を剔抉し之れが救濟の道を盡すあらずんば則ち弊毒浸漸の極遂に或は看護婦の前途を呪咀し衛生治病の機關の上に不安と障礙を與ふるに至るやも亦た測る可からざらむとす積弊纏綿危機前に横はる是れ豈に吾人の冷然看過す可き秋ならむや料るに現今看護婦並に看護婦會に關する弊害多端にして之を數ふるに堪へざるも而も其依て來る所を詮するに一に是れ看護婦會の取締に關する法規の設定を缺き之を經營するに何等の成規何等の制限なきの結果に歸因す故に吾人は時局の趨勢と現下の情態に鑑み看護婦の綱紀を振肅し弊害を匡救するの第一義として看護婦會取締規則の制定を仰ぎ同時に看護會同業組合を設立して東京府管下の看護婦會を統一し同業一般の秩序を維持し各自の利權信用を保障するの急務なるを信じ乃ち爰に看護婦會取締規則の設定を出願するに至りたるものとす云々

○匈牙利の長壽者

この間、匈牙利のナギタルカニイと云ふ所で、その土地第一の高老者マルチン、シユワルツ夫人と云ふのが亡くなつた。年は百十七歳であつた。匈牙利の新聞で見ると、この婦人の體格は實に立派なもので、これ迄一度も病氣をしたことがない、而して亡くなる當日迄も食が善くつて、迚も若い者も及ばぬ程であつたと云ふ且つ年にも拘らず非常の元氣者で時々その九十歳になる長男を毆打するやうなこともあつたがこの外に八十三歳になる次男と、八十五歳になる娘を遺して死んだのである。この家族は頗る難澁に暮して居るので、國王より年々金品を下賜されて居つたが、今度この哀れむべき孤兒の爲に義捐金を募集したと云ふことである。

○ボルチオ土人の妊婦心得

此頃ボルチオのサラワク博物館より發行した同博物館雜誌第一號に、シシゲート氏の報告に依りて同島ランドヤク族の間に行はるゝ妊婦の心得に就き記する所ありしが、之に依れば妊婦は最初の六ケ月間嚴く次ぎの個條を守るべきものである。一、荷を持ち運ぶべからずこれ胎兒の死するか幸に産るも步行すること能はざるべしと信ずればなり。二、卵を食ふべからず難産にて母の禍を蒙る事あるべければなり。三、井水を飲むべからず理由前に同じ。四、髪の蓋を堅く結ぶべからず分娩の時母子の死する事あればなり。五、必ず入りたる入口家又は室のより出でざるべからず若し出入口を異にする時は難産すべければなり。六、蛙の脚を裂くべからず胎子の手足蛙の破られたる脚の如くにて産るべければなり。七、水中に石或は他の如何なる物にても投げざる樣に注意せざるべからずこれ水中に沈みたる物は再び浮ぶ事なきが如く胎子も死して産るべければなり。八、蛇を打つべからず薄弱なる子を産めばなり。九、バナナを植うべからず生子の腫瘍に惱むことあるべければなり。十、植物の水中に漂える根を切るべからす分娩の時妊婦の死する事あればなり。十一、鹿の肉

を食すべからず難産すればなり。十二、釘を打ち或は穴を穿つことあるべからず難産すればなり。十三、夜更けて外出すべからず又動物の血を出が如き事をなすべからず分娩の時煩累あるべければなり。この期間に於て夫は上記の内なる一、四、六、十、十二、及び十三の個條を守るべきものとせり、而して尚は左の如き禁制あるなり。一、芋を家中に持來るべからず幼子の咳をするを怖ればなり。二、竹の弓矢を家中に入るべからず幼兒の病む事を恐るればなり。三、知らざる人を産室へ入るべからずこれ母子共に驚怖すればなり。これを見れば文化の進まざる幼遲の國民の衞生法は大抵似たもので、滑稽でもあり又哀れにもなる、我邦の妊婦産婦も僅か前迄はこれに似寄つた養生法に據て居つたのである。

○石鹼消費量

英吉利の計算好きな人が一生懸命になつて歐羅巴人が一體どの位石鹼を使ふかを計算し始めた。これに隨分骨を折つたものらしいが、それでも長い間かゝつてこう〳〵目的を達した。これに依つて見ると難儀したゞけあつて英吉利人の自慢の種になる成績が擧つたので好かつたと云ふのは、石鹼を多く消費する國民程文明の進んだ國民とすれば、英國が一番開けて居ることになるからである。實際又英國人は清潔好で能く手を洗ふし、其他のものも石鹼をかけて洗濯する、それで其統計に據て見ると、英吉利人は銘々一箇年間に二十一ポンドからの石鹼を使つて居る、石鹼を使ふことの多いのが文明のそれだけ高く進んだ證據とすることが出來るものとすれば、確かに英國は世界文明の先頭に立つ譯である。次には米國人も殆ど英吉利人に負けぬ程洗濯好と見えて、一年一人平均十七ポンド程の石鹼を泡にする。それから佛蘭西人は第三位で、十五ポンド、次には獨逸國で、全獨逸國民の頭に割當てゝ見ると一年平均一人十ポンドの石鹼を溶かして居る、それは四番目の石鹼文明國になる譯である。墺太利は、なか〳〵節儉で、石鹼を費すこと僅かに五ポンド獨逸の半分であ

る。最も清潔の德に於て劣つて居るのは露西亞で、露國人平均一年たつた二ポンドの石鹼を消費して居る。

廣告

○新潟支會海水浴場開設

私立大日本婦人衞生會新潟支會にては同市衞生會と聯合の上寄居濱に於て例年の通り七月十五日より海水浴場を開設し、諸般の設備も整ひ入浴者も逐年增加する模樣なるは喜ぶべきことなり。

○本會入會者

○事務所申込

●相州小田原十字町三ノ七〇八　特別會員　能勢しむ子

●小石川區同心町二五　通常會員　森田かの子

○新潟支會入會者

○中村しげ子紹介

特別會員　渡邊さめ子

特別會員　池田ちか子



○轉居

●小石川宮下町二〇　島田濱子

●本郷區西片町一〇、イノ八へ　市原すみ子

●神田區駿河臺甲賀町十三へ　金杉まつ子

●麴町區富士見町二ノ三二へ　三好初乃子

●日本橋區龜島町一ノ二一へ　橋田あい子

●下谷區仲徒町二ノ六五へ　篠　やえ子

●神戸市楠町七丁目大倉別邸内へ　本多いさ子

●小石川區音羽町五ノ一七へ　外山はつ子

●大阪市東區見伏町四ノ三六へ　植村妙子

●京都市聖護院上ノ畑二七へ　土屋春子

●英國ロンドン日本大使館へ　加藤春路子

前髪心の覇王美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衛生と經濟さを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺中	貳匁四分
壹尺貳寸大	三匁四分
壹尺五寸極大	五匁五分

新案特許二〇三二四號
專賣特許出願中

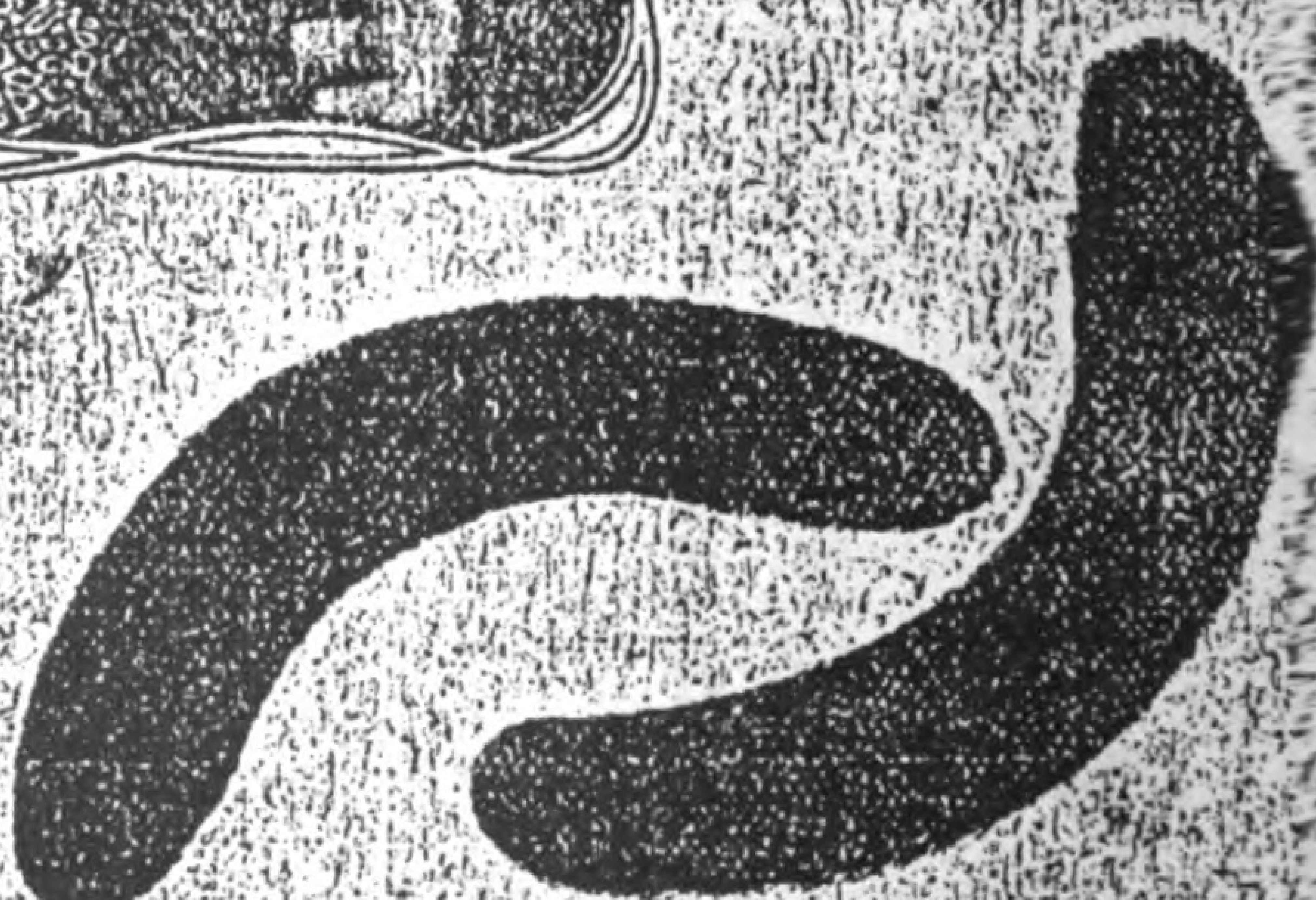
パリーみやげ

美人印ヘーヤロール

本品の特長は
量目は極めて輕く
形は永く崩れず
衛生的なるにあり



到る處の小間物店にあり



東京市神田區豊島町拾七番地
コロップばかし發賣元
田中金三郎
振替口座東京一八〇八八番

私立大日本婦人衛生會徽章規定

第一條　大日本婦人衛生會會員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





○本會徽章料左の如し
○通常會員章
第參號
メツキ製拾貳錢、送費六錢
第貳號
正銀製四拾錢、送費六錢
○終身及特別會員章
第壹號
七拾錢（黑塗箱入 送費九錢）
六拾錢（桐箱入 送費六錢）

第二條　會員章は本會竝に支會の集會に出席する場合は勿論襟止釦用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價
一冊　定價金貳拾錢　郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分）　前金郵稅共　金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分）　前金郵稅共　金壹圓八拾錢

廣告料
一頁六十二行　一行二十三字
一頁　金三圓　半頁　一圓五拾錢
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行十五錢

規定
○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新舊宿所通知セラレタシ

明治四十四年八月十七日印刷
明治四十四年八月二十日發行

編輯者兼發行者　東京市本郷區駒込追分町三十番地　荘司秋次郎
印刷者　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　今井甚太郎
印刷所　東京市本郷區駒込林町百七十二番地　杏林舍

發行所　東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地　私立大日本婦人衛生會事務所

賣捌所
東京市本郷區龍岡町　吐鳳堂
東京市銀座四丁目　東海堂
同市京橋區鎗屋町　良明堂
同市本郷區本富士町　明文館
同市同區春木町　南江堂支店
京都市寺町二條南入　若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町　北隆館
同市神田區表神保町　東京堂
同市本郷區本富士町　盛春堂
名古屋市本町三丁目　丸善書店

婦人衛生雜誌第二百六十一號（明治四十四年八月二十日發行）明治四十三年十二月二日第三種郵便物認可〔毎月一回二十日發行〕

九月の卷發行

新婦人

第一年第六號 定價 一冊二十八錢郵税二錢五厘 六冊前金郵税共壹圓七拾錢

七月號八月號賣切となり高需に背くの罪實に萬謝の外なく候 本月號は十分の刷増をなしたれば前二號賣切の失態は切に御高恕あらん事を冀ふ

睡鴿 油繪極彩色……川村清雄筆

香汗淋漓 四美相擁して盡中嬌聲あり（石版極彩色）……鰭崎英朋筆

臙脂の匂 佳人浴を出て涼風肌を甜む……コロタイプ寫眞

英京に於ける伏見若宮妃殿下●二條公爵夫人●小笠原伯爵令嬢●大隈伯爵夫人●毛利子爵令嬢●北村巴女史●堀内すま子嬢●吉村千枝子嬢●東郷男爵令嬢太田書記官長令嬢名倉けい子女史●高間惣七氏令嬢●宮中女官尾村鉄子嬢●葉室孝子嬢●閨秀畫家中山彩畝女史●畫室裡の上村松園女史●閨秀音樂家鈴木のぶ子嬢田中勝代嬢 婦人百態 當選寫眞披露 其他例により百花絢爛紅紫拉雑

讀むもの 虚榮心強き兩親の玩具（寺尾博士）巴里婦人の虚榮（山崎直三）貞操を蹂躙する男子の責任（平出辯護士）男心の解剖（北原末子）其他數十篇……

恐るべき同性の愛……婦女通信社長 松本順造

妾の良人たる者なきか……小島ふみ子

附録 家庭日記 九月分 温度表・晴雨表・獻立表・來客簿並に九星舊暦附

新婦人見本 郵券卅錢五厘

賣捌所 全國著名の書林雜誌店

發行所 東京市本郷區龍岡町 振替東京三〇五八番 聚精堂 電話下谷一六七二 電話下谷四〇七九